

第4章 教育

第1節 教育制度等

(1) 教育制度の変遷

戦後の教育改革

我が国は1945（昭和20）年8月にポツダム宣言を受諾し、終戦を迎えた。我が国の教育政策は、GHQ（連合国軍最高司令官総司令部）が1945年10月に出した五大改革指令により進められることとなった。GHQは極端な国家主義、軍国主義の表現を排除し、基本的人権の思想に合致する教育を奨励した。1946（昭和21）年11月3日公布の日本国憲法の第26条では基本的人権の一つとして「教育を受ける権利」が定められた。この条文に基づいて1947（昭和22）年3月に制定されたのが、教育基本法であり、また学校制度の改革を目的として学校教育法が制定された。

学校教育法の公布により修業年限は小学校が6年、中学校3年、高等学校3年、大学4年となった。この「六・三制」は戦後の教育制度の基本の一つとなる。当別においても国民学校に替わり、「六・三制」に基づくいわゆる新制小学校・中学校が開校したが、校舎や教員の確保が容易ではなく、難題となった。

また、国内の教育基準として学習指導要領が制定された。これは各学校の教育内容や授業時間などの編成基準を示すものであり、教育現場で反映された。

北海道では1952（昭和27）年2月、独自の教育事業として、小学校から高等教育までの学校別教育目標が策定され、この目標の主な観点は1951（昭和26）年に策定された北海道総合開発計画^{*1}を踏まえ「北方生活に適應する健康の増進」、「強靱な開拓精神と豊かな情操の涵養」、「科学的に生産を高める技術の形成」、「北方生活文化の創造」、「進取的な民

^{*1} 北海道総合開発計画は、北海道開発法に基づき、北海道の資源・特性を活かして、我が国が直面する課題の解決に貢献するとともに、地域の活力ある発展を図るため、国が策定するもの。1951年に最初の計画が樹立されて以降、2023年度まで8期にわたっている

主社会の建設」の五つが示された（『北海道教育史 戦後編1』）。

その後、昭和30年代の高度経済成長期を経て、高等学校進学率は1973（昭和48）年に90％台に達した。しかし、この時期に行われた学力重視の「詰め込み教育」は成績不振者の増加や不登校問題、いじめ問題などを生じさせた。

こうした状況を踏まえて、1977（昭和52）年改訂の学習指導要領では、従来の「詰め込み教育」から「ゆとり教育」に方針転換し、戦後増え続けていた授業時間が、初めて減ることとなった。また、1989（平成元）年改訂の学習指導要領で、小学校低学年の理科と社会科が生活科となった。その後、1992（平成4）年から段階的に学校週五日制が導入され、2002（平成14）年4月から完全学校週五日制となった。

しかし、2008（平成20）年に学習指導要領を改訂し、確かな学力、豊かな人間性、健康・体力を育むことからなる「生きる力」の育成に重点を置くこととし、小・中学校の授業時間の10％増加や、小学校での外国語活動導入、「総合的な学習の時間」の削減を行い、現在に至っている。

当別町教育目標と教育大綱

1956（昭和31）年1月、町は当別町教育目標を設定した。研修会に参加した6名の教頭が設定準備委員会を結成し、次に当別町教育目標設定委員会が委員22名で構成された。そして教育委員会ではこれを諮問し、答申を得て、委員会設置を決定した。

この目標では「住みよい当別町建設のために強固な開拓者精神をもって」という前提のもと、北海道が独自に掲げた教育目標を踏襲し、次の四つの観点が掲げられた。また、それぞれの観点に重点目標、一般目標が掲げられた（詳細は『当別町史』を参照）。

- ①科学的生産技術を形成する
- ②民主的社会を建設する
- ③生活文化の向上を図る
- ④北方生活に適合した健康の増進



写真1 中小屋小学校の60周年記念式の様子（1960年）

その後、当別町教育目標が設定されてから20年以上が経過した1978（昭和53）年に、高度経済成長下における社会状況、経済状況の変化に対応するため、当別町教育目標が改訂されることとなった。改訂に際して、新しい教育目標は従来の教育目標設定の考え方を踏襲して、当別町の地域性を反映したものにするとともに、1970（昭和45）年制定の「当別町民憲章」（詳しくは『当別町史』を参照）も踏まえて、次の通り設定した。

- ①強じんな精神とたくましい身体をつくる
- ②科学的な知識や技能を身につける
- ③豊かな情操の涵養と文化の創造につとめる
- ④自主的な判断力と社会的徳性をつちかう
- ⑤明るく豊かで住みよい郷土をきずく

この「当別町教育目標」では、地域づくりのために健康な精神と身体がなければ不可能だという前提から、①を基礎的要素とした。また、人格形成に必要な要素として、②、③、④を盛り込み、目標的要素として⑤を示した。

2015（平成27）年には「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の一部改正に伴い、地方公共団体が教育・学術及び文化の振興に関する総合的な施策について、その目標や施策の方針を定めることとされたことから、町長と教育委員会で構成される総合教育会議で協議の上、「当別町教育大綱」を策定した。計画期間は原則として2015年度から2018（平成30）年度までの4年間とし、基本方針を次の通り定めた。

・学校教育

変化の激しい時代を生きる子どもたちに、基礎基本をしっかりと身につけさせ、思考力や判断力を磨き、主体性をもって多様な人々と協働し、自らの手で自らの人生を切り開いていける力をつける教育を行う。

・社会教育

全ての町民が幸せを感じることのできる生涯学習社会の実現を目指す。

・地域の教育力の活用

学校と保護者、地域の連携・協働によって、子どもたちの学びを支援する。

また2015年度策定の教育大綱が終期を迎えたことから、2019（令和元）年度の第1回総合教育会議において、次期大綱を策定し、基本方針を次

の通り定めた。

・学校教育

- 1 一人ひとりを生かす創意ある学校経営
- 2 自ら考え創造する力を育てる学習指導
- 3 豊かな心で自ら実践する力を育てる生徒指導
- 4 生命を尊ぶ態度と強い身体を育てる健康安全指導

・社会教育

- 1 自ら学び自ら活動し伝統を生かし当別をつくる人材の育成
- 2 明日を創造する青少年をたくましく育てる社会教育の推進
- 3 健康な心身をつくり明るいまちをつくるスポーツの推進
- 4 楽しさと生きがいをつくり育てる社会教育の推進

教育委員会の変遷

教育が不当な支配に服することなく、公正な民意により、地方の実情に即した教育行政を行うことを目的として、1948（昭和23）年7月15日、教育委員会法が公布され、北海道では1952（昭和27）年11月1日までに、各市町村に教育委員会を設置することとした。教育委員の選出は、教育行政の自立性の確立や民主化を図るため住民が投票で教育委員を選ぶ公選制を行っていた。

当別町でも選挙により、山田茂氏、近藤善市氏、杉本初雄氏、高橋祐四郎氏の4名が当選し、町議会より選ばれた松岡長作氏を加え、5名が任命された。また、互選により、山田茂氏が初代教育委員長、杉本初雄氏が副委員長となった。その後の教育委員長、教育長は次頁表1と表2のように変遷した。

1956（昭和31）年には公選制が廃止となり、地方自治体の首長が議会の承認を得て教育委員を任命する任命制度に変更となり、教育長は教育委員の中から選出された。

2000（平成12）年4月、地方分権推進一括法^{*2}が施行され、教育委員会制度も変更された。教育長の任命承認制度を廃止し、教育委員長以外の委員の中から選任させることとなった。

また、2015（平成27）年4月に改正された「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」により、教育行政の第一義的な責任者としての「新しい教育長」が位置づけられるとともに、首長と教育委員会が力をあわ

^{*2} 地方分権推進一括法は正式名称を「地方分権の推進を図るための関係法律の整備等に関する法律」という。同法により、知事や市町村長が国の事務を処理する機関委任事務制度が全廃となり、法制的には、国と地方公共団体は「対等・協力」の関係に立つことになった

表1 当別町の歴代教育委員長

代	氏名	期間
1	山田 茂	1952（昭和27）年～1953（昭和28）年
2	杉本 初雄	1953（昭和28）年～1956（昭和31）年
3	高橋 祐四郎	1956（昭和31）年～1959（昭和34）年
4	藤沢 健夫	1959（昭和34）年～1961（昭和36）年
5	高橋 祐四郎	1961（昭和36）年～1964（昭和39）年
6	石川 勝男	1964（昭和39）年～1968（昭和43）年
7	泉 義治	1968（昭和43）年～1971（昭和46）年
8	久永 善治	1971（昭和46）年～1972（昭和47）年
9	高橋 巖	1972（昭和47）年～1983（昭和58）年
10	小山 三十五	1983（昭和58）年～1988（昭和63）年
11	戸田 紀夫	1988（昭和63）年～1990（平成2）年
12	中山 栄一	1990（平成2）年～1992（平成4）年
13	宮浦 俊英	1992（平成4）年～1999（平成11）年
14	大澤 勉	1999（平成11）年～2012（平成24）年
15	白井 応隆	2012（平成24）年～2016（平成28）年

資料：当別町教育委員会

表2 当別町の歴代教育長

代	氏名	期間
1	山田 勇	1952（昭和27）年～1953（昭和28）年
2	高橋 鋼三郎	1953（昭和28）年～1957（昭和32）年
3	久永 善治	1957（昭和32）年～1963（昭和38）年
4	高砂 正清	1963（昭和38）年～1976（昭和51）年
5	佐藤 晴之	1976（昭和51）年～1986（昭和61）年
6	有澤 慎雄	1986（昭和61）年～1997（平成9）年
7	藤中 彰二	1997（平成9）年～2001（平成13）年
8	高橋 義	2001（平成13）年～2009（平成21）年
9	山内 秀治	2009（平成21）年～2013（平成25）年
10	本庄 幸賢	2013（平成25）年～2016（平成28）年
11	本庄 幸賢※	2016（平成28）年～2022（令和4）年
12	三澤 吏佐子	2022（令和4）年～2025（令和7）年

資料：当別町教育委員会

※「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」により、教育長として再任された。

せて教育課題に取り組む必要があることから、首長を代表とする「総合教育会議」の設置が義務づけられた。

当別町では、2016（平成28）年9月の町議会で、教育長として本庄幸賢氏を任命することが同意され、10月より新教育委員会制度に移行した。また同時に総合教育会議が設置された。

（2）当別町のエ育計画

本項では、各年次における総合開発計画および総合計画に示された教育分野の中長期的な方向性、課題などを「教育計画」と位置づけ、各計画の概要とそれに付随する教育事業の経過を記述する。

1973年の教育計画

1973（昭和48）年に策定された当別町総合開発計画に盛り込まれた、教育分野における基本構想となる「教育計画」は次頁表3の通り策定された。

小中学校では材木沢小学校など4校が、1965（昭和40）年から1973年までに閉校となっており、こうした状況から、学校規模の適正化と教育条件の近代化などが課題とされていた。

当別高校では札幌圏からの入学志願者増加が予想され、学校設備の拡充が課題とされていた。また当時、大学の進学率が高まっていたことから新たな教育機関の誘致が課題とされていた。

さらに町民が利用できる体育施設は当時、体育総合道場、中小屋町民スキー場、町民プールなどがあったものの、その他は学校の体育施設に利用が限定されていた。こうした状況を改善すべく、体育施設の整備拡充を施策として掲げた。このように当時の教育課題は、当別町や近隣市町村の社会状況を反映したものであった。

この計画によって青山中央小学校新校舎建設工事、東裏小学校プール建設工事などが実施された。また、1973年の当別中学校のスクールバスの導入、1975（昭和50）年に情緒障害児のための特殊学級が1学級増設された。1977（昭和52）年には上当別に野球場が完成した。



写真2 スクールバスの様子（1973年）

表3 1973年の教育計画

分野	課題	主要施策
幼児教育	保育所との関連で幼稚園施設の充実強化	・4～5歳の入園希望児を就園することを目標とした施設設備の充実 ・保育所の向上 ・幼児教育施設充実のために国の財源負担引き上げと援助措置を養成
小中学校教育	適正規模の学級への再編成 教育施設の整備充実 人口増加に対応した学校区の再編成	・学校規模の適正化と教育条件の近代化を推進し、小中学校の統合を進める。統合に合わせてスクールバスの充実をはかる ・教育施設の整備近代化 ・学校体育施設及び給食センターの建設 ・特殊学級の整備充実 ・林間学校の設置
高等教育	当別高校の整備拡充 大学教育施設の誘致	・道立当別高校の整備拡充 ・大学専門的教育機関の誘致
社会教育	(社会教育施設) 図書館などの施設の充実 (社会教育団体) 指導者層の充実 (社会体育) 一般住民が利用可能な施設の充実	・青少年教育の推進 ・各種学級の開設と成人教育の充実 ・文化活動の推進と文化施設の整備充実 ・社会教育の振興と体育施設の整備充実

資料：当別町総合開発計画

1980年の教育計画

1980（昭和55）年に策定された当別町総合開発新計画に示された「教育計画」は、次頁表4の通りである。

小中学校では、当別小学校が30学級であるのに対し、他地域に小規模の小中学校があり、市街地への人口集中や土地区画整理事業により人口が増加していることから、新設校を建設することが課題とされていた。また当時、弁華別小学校、蔵岱小学校、弁華別中学校、西当別中学校は木造であったため、改築が求められていた。さらに、国の推進するゆとり教育に即した教育内容が求められ、教育技術の普及が課題とされていた。

社会教育活動では、普及しつつある地域子ども会、文化活動、スポーツなどの各活動において、施設の整備、リーダーの育成などが課題とされており、この基本方針に則り、総合体育館建設工事（1989年完成）などが実施された。

表4 1980年の教育計画

項目	分野	基本方針	主要施策
学校教育の充実	就学前教育	保育所との相互連携を図りながら集団教育の充実に努め、家庭教育の両面から就学前教育を推進する。	・幼稚園教育の充実 ・家庭教育の推進
	小・中学校教育	教育環境整備の推進、教育内容の充実	・教育環境の整備充実 ・教育内容の充実
	高等教育	高等学校教育機会の拡充、大学を核とした総合的環境整備、新規大学研究機関などの誘致	・高等学校教育機会の拡充 ・大学・試験研究機関の充実及び誘致
社会教育の充実	青少年教育	施設の整備拡充、育成者の養成、団体活動の促進、非行防止運動の展開	・青少年教育の充実 ・指導体制の充実 ・施設の整備
	成人教育	施設の整備拡充、育成者の養成、団体活動の促進、リーダー養成、自主的な成人団体活動推進	・婦人団体及び成人団体活動の充実 ・各種講座・教室等の開設拡充 ・指導体制の充実 ・施設・整備の充実
	芸術・文化	芸術・文化に接する機会の拡充、施設の整備、リーダー養成、文化財保護施設の整備充実の促進	・芸術・文化活動の普及奨励 ・文化交流の推進 ・文化財の保護 ・施設・設備の整備充実

資料：当別町総合開発新計画

1992年の教育計画

1992（平成4）年に策定された第3次となる当別町総合計画に示された「教育計画」は、次頁表5の通りである。

「学校教育の充実」の主要事業に掲げられている「学校校舎の整備」に基づき、1993（平成5）年、1996（平成8）年に西当別小学校校舎が増築された。

社会教育事業では、1997（平成9）年10月5日に「コミュニティの充実」の主要事業にある「（仮称）公民館太美分館の建設」に基づいて、西当別コミュニティセンターが開館した。

また、町では児童の健康管理や健全で良い人間関係を育成するという観点から、完全給食の実施が課題とされ、1996年に実施となった。

表5 1992年の教育計画

項目	分野	主要施策	主要事業
学校教育の充実	幼児教育	・幼児教育施設の整備、充実 ・施設の適正配置 ・教育効果向上の推進	・幼稚園統合及び新設（町） ・入園年齢の引き下げ（町）
	小中学校教育	・学校規模の適正化 ・教育環境の整備充実 ・教育内容の充実 ・学校給食の実施 ・特色ある学校づくりの推進	・学校給食施設の整備（町） ・統合小学校の検討（町） ・学校校舎の整備（町） ・木造校舎の整備（町） ・外国人講師招へい事業（町）
	高等教育	・高等学校教育機会の拡充 ・地域活動への参加促進 ・機能的な環境整備	・東日本学園大学学部新設の促進（民間） ・高校、大学との交流機会拡大
	特殊教育	・障害児教育の充実 ・教育環境の整備 ・交流学習の推進	・母子通園事業（町）
社会教育の充実	青少年教育	・青少年団体の育成 ・リーダーの育成 ・施設の整備 ・健全育成と非行防止活動の強化	・青少年育成事業 ・青少年国内、海外研修事業（町）
	成人教育	・各種学習機会の拡大、充実 ・団体活動等の助長 ・施設・設備の充実	・各種学習活動の推進（町） ・情報及びリーダーバンクの設置（町）
	スポーツ・レクリエーション	・施設の整備拡充 ・参加機会の拡充及び指導体制の確立 ・自然・河川敷の利用促進	・中小屋スキー場整備事業（町） ・若葉公園施設の充実（町） ・リバーサイドパーク整備事業（民間）
コミュニティの充実	コミュニティ活動	・施設の整備推進 ・リーダーの育成・確保 ・コミュニティ活動の助長	・地域集会施設の建設（町） ・（仮称）公民館太美分館の建設（町）

資料：当別町第3次総合計画

1999年の教育計画

1999（平成11）年に策定された当別町第4次総合計画に示された「教育計画」は、次頁表6の通りである。

小中学校では、生徒数の増減を見極めながら学校施設の整備を進めた上で、各地域の施設の格差を解消することがテーマとされていた。高等教育では、当別高校農業科の生徒などの実習活動を地域活動に結びつけ、生徒の社会参加を促進することが課題とされていた。

北海道医療大学関係では、当別町民が大学に蓄積された情報を有効に活用できるように、町と大学とのネットワークの構築が課題となっていた。そのため、主要事業に「大学図書館とのネットワークの検討」を掲げ、2006（平成18）年9月、町民の大学図書館利用が可能となった。

生涯学習活動では、町民の学習、健康、体力づくりに対する関心の高まり、学習要求の多様化という状況から、生涯各期における学習機会の拡充や、町民の要望に合った学習情報の収集、提供と社会教育の充実な

表6 1999年の教育計画

項目	分野	基本方針	主要施策	主要事業
幼児教育・学校教育の充実	幼児教育の充実	幼児の遊びを中心とした楽しい集団生活の中で、多様な体験を通じた豊かな感性を育み、望ましい習慣や態度を身につける幼児教育の充実に努めます。	・幼児教育施設の適正配置 ・教育環境の充実	・幼児教育施設の整備 ・西当別地区幼稚園の新設（民間）
	小中学校教育の充実	21世紀を担う子どもたちの健やかな成長を願い、児童の権利条約を尊重し、「生きる力」を育むため、健康な心身の育成を基盤に、自ら学び、自ら考え、他人と協調し優しさと思いやる心を持つ人間性を育み、一人ひとりの個性を生かした学校教育の充実に努めます。	・教育内容の充実 ・教育環境の整備 ・学校施設の適正化 ・地域に密着した郷土教育の充実 ・学校給食の充実	・各小学校外構整備事業 ・弁華別小学校改築事業 ・西当別中学校校舎増築事業 ・統合小学校の検討 ・各小中学校パソコン導入事業 ・適応指導教室の配置 ・学校給食の充実 ・教員住宅整備事業
	高等教育の充実	高等教育における生徒の個性と能力を高める教育の充実を要請するとともに、社会性を身につける実践活動を支援します。また、北海道医療大学との連携を深め、大学のノウハウを活用できるシステムづくりの検討を進めます。	・生徒の社会参加促進 ・北海道医療大学機能の活用 ・大学との連携 ・地域活動への参加促進	・当別高等学校への支援 ・大学図書館とのネットワークの検討
	障害児教育の充実	心身に障害を持つ児童・生徒が、自立して社会参加できる知識と能力を身につける教育の充実に努めます。	・障害児教育の充実 ・教育環境の整備 ・交流学習の充実 ・就学援助の充実	・通園センター事業 ・通級指導教室の開設
生涯学習の推進	生涯学習体系の構築	学習要求が多様化・専門化・高度化していく中、町民の学習活動を支援・奨励・促進するため、学習環境づくりと生涯学習体系の構築を図ります。	・生涯学習体系の構築 ・学習活動の推進 ・人材育成事業	・生涯学習セミナーの開催 ・人材育成事業
	青少年教育の充実	21世紀の当別を担う子どもたちの健やかな成長を願い、青少年活動の活性化やリーダーの養成を図り、青少年が地域社会に積極的に参加する環境の充実に努めます。	・青少年団体の育成 ・指導者の育成 ・青少年交流事業の促進 ・青少年の健全育成	・子どもプレイハウスの充実 ・子ども会リーダー養成事業 ・子ども会育成事業 ・青少年交流事業
	社会教育の充実	町民の生涯各期にわたる自主的な学習や社会参加への意欲を一層高め、家庭・学校・地域社会との連携と本町の自然や歴史・文化など地域の特性を生かし、心豊かな人生を築くための社会教育の充実に努めます。	・生涯各期における学習機会の充実 ・大学等の公開講座の推進 ・団体活動の促進 ・学習情報の提供 ・社会教育施設の充実	・学習機会の充実、学習情報の提供 ・女性の研修事業 ・女性の学習活動推進事業
	スポーツ・レクリエーションの充実	スポーツ指導者の養成とスポーツグループの組織化を促進するとともに、生涯を通じて気軽に利用できるスポーツ・レクリエーション施設の設備充実に努めます。	・スポーツ・レクリエーション活動の充実 ・スポーツ団体の育成 ・スポーツ・レクリエーション施設の充実	・生涯スポーツの普及と促進 ・指導者組織の活用 ・スポーツ施設の整備
コミュニティ活動の促進	コミュニティ活動の促進	地域社会の連携意識を醸成し、活力あるまちづくりを推進するため、各種情報の提供や施設の整備拡充に努めるなど、コミュニティ活動を促進します。	・コミュニティ施設の整備 ・コミュニティ活動の支援	・地域集会施設の整備 ・地域集会施設運営費補助

資料：当別町第4次総合計画

ど学習環境の整備が求められるとしていた。

青少年教育の項目では、少子化、核家族化、地縁の希薄化などで青少年をとりまく家庭や地域の教育力が失われつつあるため、家庭、学校、地域が連携して子どもと地域社会との関わりを深め、人間性と国際感覚を身に付けた青少年の育成に努めることが必要だとされた。

2009年の教育計画

2009（平成21）年、当別町第5次総合計画に示された「教育計画」は、表7のように策定された。

計画策定の背景として、まず、住民の生活様式や価値観の多様化が進行し、町民一人ひとりの個性、能力が発揮できる地域づくりが求められていた。次に学習情報の提供、学習支援、相談体制の充実、豊かな人間性と国際感覚を身に付けた人材の育成が課題とされていた。また、高等教育機関と連携し、文教都市としてのまちづくりが求められていた。

学校教育では、児童一人ひとりに対するきめ細かな教育活動が求められていたこと、いじめ問題などの社会問題防止の観点から、学校、家庭、地域が連携して青少年を育成する機運が高まっていたことが挙げられた。

社会教育活動では、町内文化団体活動者の高齢化、生活習慣病の予防、子供の体力低下などから計画策定が求められた。

表7 2009年の教育計画

項目	分野	施策の方向性	関連計画	想定される事業
すてきな人づくり(子育て・生涯学習)	生涯学習の推進	○生涯学習活動の促進 ・高等教育機関、団体、組織、近隣自治体と連帯協力、学習成果を活かすことが出来る生涯学習社会の構築 ・学習情報の提供、相談機能の充実 ・当別町人材育成基金を活用した調査研究・交流・研修などへの支援 ・生涯学習関連施設の適正な管理運営	・当別町生涯学習推進計画 ・当別町社会教育推進計画 ・当別町「協働の指針」	・住民ニーズに対応した生涯学習推進事業 ・学習情報の提供や相談機能の整備 ・主体的な学習活動に対する支援事業 ・当別町人材育成基金の活用推進事業 ・人材バンク事業 ・生涯学習関連施設の管理運営
		○高等教育機関との連携 ・大学と当別町の相互協力体制の構築 ・北海道当別高等学校の活動を尊重し地域の活性化に繋げるために連携の強化に努める。 ・高等教育機関との連携強化	・当別町生涯学習推進計画 ・当別町「協働の指針」 ・当別町地域公共交通総合連携計画 ・東海大学との学官連携に関する基本協定	・北海道医療大学総合図書館との相互貸貸事業 ・生涯学習講座など文化活動推進の連携 ・学生活動支援サポート事業 ・学官連携事業 ・当別町コミュニティバス運行事業（地域公共交通活性化事業） ・東海大学北海道キャンパスとの連携協定による国際交流の推進
	学校教育・青少年教育の推進	○学校教育の充実 ・学校教育環境の整備 ・地域の環境や人材などの教育資源を活かした特色ある学校づくり ・町内小中学校、高等教育機関と学校相互の連携協力を図り、子供の能力、個性に応じた教育を進める。 ・課題に対応した学習内容・学習指導の充実に努めます。 ・関係機関や地域と連携し児童の登下校時の安全対策、安全確保に努める。 ・栄養バランスの取れた学校給食の提供に努める。	・当別町生涯学習推進計画 ・当別町「協働の指針」	・学校支援地域本部事業 ・小学校英語教育・情報教育の推進 ・学校図書館の整備 ・特別支援教育の推進 ・安全な教育環境の整備 ・スクールバス運行事業 ・学校の統合や学校施設の適正配置、規模の適正化の検討 ・学校給食センターの運営

第3部 本 編

すてきな人づくり(子育て・生涯学習)	学校教育・青少年教育の推進	○青少年教育の充実 ・学校、家庭、地域が連携し青少年期から地域社会の活動に参加可能な環境づくりに努める。 ・青少年活動の活発化やリーダーの育成に努める。 ・子どもたちの道徳心を養い、関係機関と連携し地域で子どもを見守り育てる環境づくりに努める。 ・ジュニアリーダー活動などの青少年活動グループの育成を継続する。	・当別町生涯学習推進計画 ・当別町社会教育推進計画 ・当別町「協働の指針」	・学校支援地域本部事業 ・青少年団体の育成事業 ・青少年育成団体への支援 ・青少年交流活動の推進 ・当別町人材育成基金の活用推進事業 ・少年指導センター事業
	子育て支援の推進	○子育て支援の充実 ・総合的な子育て支援施策の展開 ・地域で見守る子育ての充実 ・地域の家庭教育基盤の形成に努める。 ・障がいを持つ子どもや発達に心配のある子どもへの療育体制づくりに努めます。	・当別町地域福祉計画 ・当別町子育て行動計画 ・当別町障がい福祉基本計画 ・当別町生涯学習推進計画 ・当別町「協働の指針」	・地域子育て支援センター事業 ・当別町ファミリー・サポート・システム事業 ・子ども発達支援センター事業 ・特別保育事業 ・家庭教育支援事業
		○幼児教育・保育の充実、学童保育の推進 ・幼稚園及び保育所の一元化に努める。 ・民営化による幼稚園・保育所の一体化を推進するなどし、子育て環境の形成に努める。 ・保育所において特別保育事業を実施し、乳幼児支援の推進に努める。 ・学童保育の運営体制整備に努める。	・当別町地域福祉計画 ・当別町子育て行動計画 ・当別町生涯学習推進計画	・幼保一元化の推進 ・幼稚園・保育所民営化の推進 ・放課後児童対策事業 ・特別保育事業
	文化・スポーツ活動の振興	○芸術・文化活動の振興、歴史・文化の伝承 ・芸術文化活動への自主的参加を促し、芸術文化に触れる機会を充実させ、多様化してきた活動に対応した活動環境の充実に努める。 ・ふれあい倉庫の活用により文化芸術活動を支援する ・若者への芸術文化の伝承活動を支援する。 ・地域の歴史文化の学習、伝承活動の支援、文化財の保存に努める。	・当別町生涯学習推進計画 ・当別町社会教育推進計画	・文化祭の開催支援 ・当別赤れんが6号（ふれあい倉庫）の活用 ・伝統文化子ども教室事業 ・歴史ボランティアの育成・活動支援 ・町指定文化財の保護・保存・活用
		○スポーツ・レクリエーションの振興 ・生涯スポーツ社会の実現をめざし、総合型地域スポーツクラブの設立支援やスポーツ施設の維持管理・指導体制の確立など環境整備に努める。 ・スポーツ活動団体の活性化を図るため、団体活動の支援に努める。	・当別町生涯学習推進計画 ・当別町社会教育推進計画	・各種スポーツ振興事業の推進 ・総合体育館など各スポーツ施設管理運営 ・総合型地域スポーツクラブの設立・運営支援 ・地域スポーツ指導者の育成
	国際交流・国内交流の推進	○国際姉妹都市との交流 ・20年間続いているスウェーデン王国レクサンド市との交流を継続を目的として教育・文化・経済分野のほか、環境・観光・福祉の分野でも交流を深め、友好親善に寄与する夏至祭開催、交流団体の活動を支援する。	・東海大学との学官連携に関する基本協定	・当別町夏至祭などイベントの開催支援 ・国際交流連絡員事業 ・当別・レクサンド都市交流教会との連携強化 ・スウェーデン大使館・スウェーデン交流センター・北方圏センターとの連携による国際交流と企業誘致の推進 ・東海大学北海道キャンパスとの連携協定による国際交流の推進
		○国内姉妹都市・友好都市との交流 ・当別町の歴史を学び歴史的に結びつきが強い複数の地域間の人的・経済的な交流を進め、新しい文化の創造や人材育成に努める。		・大崎市（旧岩出山町）、宇和島市との3市町による友好交流の推進 ・特産品・名産品の相互販売

資料：当別町第5次総合計画

教育基本計画

町ではこれまで総合計画の中に盛り込まれた「教育計画」を中長期的な計画としてきたが、前述のように2015（平成27）年に「当別町教育大綱」を策定し、その後の2019（令和元）年策定の当別町教育大綱のもと、「当別町教育基本計画」（2020年度から2024年度まで）が策定されることになった。また、この基本計画に基づいて、「学校教育」、「社会教育」、「子ども未来」の部門ごとに各年度の推進計画を策定することとした。

当別町教育基本計画の基本理念として、「1 目指す人間像『社会を背負う、世界にも通用する〈知・徳・体〉を備えた人』の育成」、と「2 幸せを実感できる生涯学習社会の実現」を掲げ、各部門の基本方針は次の通りとしている。

〈基本方針〉

・学校教育

義務教育学校及び併設型を基軸とした9年間の切れ目ない一貫教育を実践する。それにより徹底した基礎学力の定着、自らの夢や目標を自らの手で切り拓いていける力、世界で活躍するためのツールとしての英語力、強い心と体など、世界に通用する人となるための確固たる基礎を作る。

また、その学びは「連続性のある多様な学び」であり、特別な支援を要する子どもたちとともに成長する教育である。

①確かな学力

主体的・対話的で深い学びにより、将来の夢や希望を実現するために必要な学力を育成する。

②豊かな人間性（心）

自分を大切に、人を大切に、ふるさとを大切にする心を全教育活動を通じて育成する。

③健全な心身

自分を支える基本である健全な身体を、全教育活動を通じて育成する。

④地域と共にある学校

地域の人材を教育に取り込みながら、地域の活性化につながる教育活動を実践する。

⑤教育環境の整備

義務教育学校設立をはじめ、ICT^{*3}など教育環境の整備を図る。

・社会教育

子ども達をはじめ、すべての町民が幸せを感じることでできる生涯学習を実践する。また、入植以来150年の中で培ってきた当別町の文化や歴史を通じて、ふるさとを愛する心を育む。

①魅力ある学習プログラム

ライフステージに応じた新たなプログラムを開発する。

②文化・芸術・スポーツ

超少子・高齢者社会に対応した文化・芸術・スポーツを展開する。

③歴史・文化財産の保存と活用

当別開拓の歴史を後世に伝え、新しい時代に生かす活動を展開する。

④児童・生徒・家庭に対する支援

地域の教育力を活用した学習支援や多様な体験活動の充実を図る。

⑤図書館機能の向上

読書活動活性化のための多様なサービスを実践する。

・子ども未来

子どもの健やかな成長のため、保護者と地域と一体となった施策を行う。また、幼児教育と義務教育の接続の充実を図り一貫教育につなげる。

①子育て支援

子育て世代の交流促進など、子育てしやすい環境の充実を図る。

②子どもの安全・安心な環境づくり

放課後児童健全育成事業の活動内容や保育サービスの多様化を図る。

③認定こども園との連携

教育課程編成・実施への助言や支援を図る。

④幼児教育と小学校との接続

就学に向けた接続プログラムの充実を図る。

⑤子ども発達支援センター機能

多様なニーズに対応した支援プログラムの充実を図る。

*3 情報や通信に関する技術の総称で、人や組織が情報をやり取りし、活用するための仕組みや技術全体を指す

第2節 学校教育

(1) 学校教育における取り組み

特色ある学校教育活動

町の特色ある教育の取り組みは、小中一貫教育の取り組み（後述）とともに始まった。2022（令和4）年度においては、授業改善について表8の取り組みを進めている。

表8 授業改善についての取り組み

取 組	実施状況
小学校高学年の一部教科担任制実施	①中学校教諭による小学校での授業（乗り入れ授業） 【英語・体育・音楽】 ②担任の交換授業【国語・算数・理科・社会】 ③加配等の活用【理科・英語・体育】
外国語教育の充実	平成26年度から小学校1～4年生にも外国語活動という形で英語に触れる時間を作り、全学年で英語教育に取り組んでいる。
1人1台端末の活用（令和2年度より導入開始）	新たな学習ツールとして、1人に1台の端末を配付し、「主体的、対話的で深い学び」へと繋げる授業展開や振り返り、意見交換等に積極的な活用をしている。また、出席停止や臨時休校、不登校には授業のリモート配信にも取り組むなど、「個別最適な学び」「協働的な学び」の実践を重ねている。
教職員研修	町教委主催の研修を夏と冬の長期休業中に開催 【令和4年度 開催テーマ】 特別支援・オンライン授業、授業改善 令和4年7月28日（木）～7月29日（金）、12月27日（火）

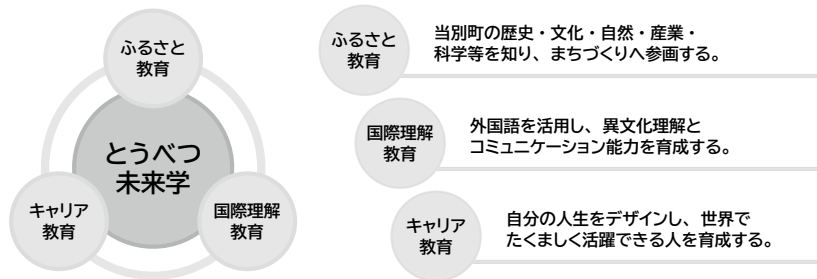
資料：「令和4年度 当別町の教育」

また「とうべつ未来学（教科横断的学習）」として、次頁図1のような内容の学習を行っている。

小中一貫教育を支える人材としては、学校教育指導主事1名、特別教育支援職員8名など、合計20名を町会計年度任用職員として採用している。

さらに教科ごとの目標、身に付けたい力、ICTを活用した家庭学習、年間の学習課程についてまとめた「学びのハンドブック」を作成し、全保護者へ配布している。本書を通じて、保護者が学校での学習内容や計画を知ることができ家庭学習をサポートする際の手引書としての活用が可能となっている。

図1 とうべつ未来学



「ふるさと教育」「国際理解教育」「キャリア教育」の3つの柱からなる教科等横断的な学習。生活科、総合的な学習、外国語、社会などの時間で実施。
ふるさと当別を知り、当別の未来について考え、国際感覚を身に付け、自分の人生をデザインする力や様々な方法で発信する力を育てることを目指す。

資料：「令和4年度 当別町の教育」

ALTの設置

1990年代前半の当別町では、1990（平成2）年3月にスウェーデン国王の来町などがあり、町内で国際化に対する理解が高まり、外国人との交流の必要性が感じられるようになった。このような背景から、1991（平成3）年度から英会話指導助手（ALT）事業が、町内の中学校で開始され、2007（平成19）年度からは町内の小学校でもALTが置かれるようになった。さらに2015（平成27）年度からはALTは2人体制に、2018（平成30）年度からは3人体制と、人員を増加した。

小学校では対象学年を当初、高学年としていたが、全国規模で「学習指導要領」が改訂されたこともあり、2014（平成26）年度から全学年に拡大した。2022（令和4）年度からは、特別支援学級でもALT事業が実施されている。2000（平成12）年度から2025（令和7）年度までのALT事業の状況は、次頁表9の通りである。



写真3 来日したレクサンド市の少年アイスホッケーチーム（1995年）

表9 ALT事業一覧（2000年度～2025年度）

年度	ALT 配置人数	小学校				中学校			
		学校数	対象学年	対象学級数	年間延べ時数	学校数	対象学年	対象学級数	年間延べ時数
2000年度	1	—	—	—	—	4	1・2・3	26	234
2001年度	1	—	—	—	—	4	1・2・3	26	234
2002年度	1	—	—	—	—	4	1・2・3	26	234
2003年度	1	—	—	—	—	4	1・2・3	26	234
2004年度	1	—	—	—	—	4	1・2・3	26	234
2005年度	1	—	—	—	—	3	1・2・3	23	207
2006年度	1	—	—	—	—	3	1・2・3	23	207
2007年度	1	4	5・6	14	70	3	1・2・3	23	207
2008年度	1	3	5・6	14	84	3	1・2・3	25	225
2009年度	1	3	5・6	14	140	3	1・2・3	22	198
2010年度	1	3	5・6	12	144	3	1・2・3	22	198
2011年度	1	3	5・6	11	165	3	1・2・3	22	198
2012年度	1	3	5・6	10	180	3	1・2・3	22	198
2013年度	1	3	5・6	10	180	3	1・2・3	19	171
2014年度	1	3	1～6	28	420	3	1・2・3	19	171
2015年度	2	3	1～6	45	485	3	1・2・3	17	153
2016年度	2	2	1～6	45	360	2	1・2・3	14	126
2017年度	2	2	1～6	45	430	2	1・2・3	13	117
2018年度	3	2	1～6	150	900	2	1・2・3	12	108
2019年度	3	2	1～6	150	875	2	1・2・3	12	108
2020年度	3	2	1～6	150	830	2	1・2・3	12	108
2021年度	2	2	1～6	150	665	2	1・2・3	12	108
2022年度	2	2	1～6・ 特別支援学級	57	559	2	1・2・3	12	108
2023年度	2	2	1～6・ 特別支援学級	57	584	2	1・2・3	11	99
2024年度	2	2	1～6・ 特別支援学級	127	574	2	1・2・3	11	99
2025年度	2	2	1～6・ 特別支援学級	92	794	2	1・2・3	10	90

資料：当別町教育委員会

大崎市との姉妹都市交流事業

1968（昭和43）年、当別町と岩出山伊達家の郷里である宮城県岩出山町（現・宮城県大崎市）との間で児童交流会が実施された。当別小学校と岩出山町にある岩出山小学校は1964（昭和39）年から姉妹校の提携を図っていたが、1965（昭和40）年に当別町100年を記念して、当別町と岩出山町の児童で交流会を実施することが決定した。

これを受けて1968年7月と8月に、岩出山町の小中学校から10名が当別町を訪問



写真4 とうべつ学園と大崎市立岩出山小学校の子ども使節団との交流の様子（2025年）

した。この来町に際して小中学生10名は岩出山町に残る『当別移住人員録』（1871年の当別移住者人名録）を持参した。当別町に着くと、駅前 で当別小学校の鼓笛隊や多くの町民から歓迎を受けた。翌年には当別町 内の小中学校から10名の生徒が岩出山町を訪問し、岩出山町長や約300 名の町民から盛大な歓迎を受けた。

その後も1973（昭和48）年と1978（昭和53）年に、当別小学校から 岩出山小学校へ訪問した。

1992（平成4）年からは「スコレチャレンジ事業」として、2泊3 日ないし3泊4日で、両町の児童生徒が相互に訪問を行った。

2023（令和5）年には、岩出山ロータリークラブ50周年事業の一環と して、とうべつ学園、西当別小学校、西当別中学校と岩出山小学校、岩 出山中学校が姉妹校締結を結んだ。

国際交流と教育

姉妹都市であるスウェーデン王国レク サンド市と当別町における教育活動での 関わりは、姉妹都市提携10周年を迎えた 1997（平成9）年9月、15名の中学生が 初めてレクサンド市に派遣されたことに 始まる。その翌年にはレクサンド市の中 学・高校生が当別町内の中学校、当別高 校、北海道医療大学を訪問した。



写真5 レクサンド高校で授業に参加した様子

2000（平成12）年からは、町の「人 材育成基金活用事業」の一環として「高校生の短期留学ホームステイ語 学研修事業」を開始した。これは高校生を対象としたホームステイと語 学研修を組み合わせた事業で、研修費用の3分の2を町が負担することと した。初年度はアメリカ西海岸に派遣され、2001（平成13）年9月には 町内中学生13名がレクサンド市を訪問、その翌年3月にはレクサンド市 から3名の高校生が来町し、当別高校の授業体験などをした。

その後、アメリカ、カナダ、オーストラリア、レクサンド市などを毎 年訪問してきたが、2020（令和2）年度は新型コロナウイルスの影響で 実施を中止した。

就学支援

町では従来から経済的理由によって就学困難な児童生徒の保護者に対して、就学支援を行っている。その内容は、新入学生に対する学用品等、修学旅行、学校給食費などに対する支援である。また、小学校・中学校の特別支援学級に在籍し、就学援助の対象にならない児童生徒の経済負担を軽減するための支援として、特別支援教育就学奨励費の支給を行っているほか、特別支援学級・通級指導教室への通学費の一部を支給している。

特別支援教育

当別小学校では障がいを持つ児童に対する教育の場として、1964（昭和39）年に「いなほ」という特殊学級を設けた。石狩管内では6番目の特殊学級設置であり、当時は1学級で児童10名、教員2名であった。

1975（昭和50）年度、情緒障がい児のための特殊学級が設置され、主に自閉症障がいの児童を対象とした教育が行われるようになった。1988（昭和63）年度、言語障がいを持った児童のための特殊学級（ことばの教室）が設置され、指導室（ゆりのこ）も併設された。

1991（平成3）年度、肢体不自由の児童を対象とした特殊学級が設置された。言語障がいの指導室は全ての障がいを対象とする指導室とされ、心身において障がいを持った児童が適切な教育を受ける機会を得ることが可能になった（『虹色の希望を未来へー当別町立当別小学校 開校120周年記念誌』）。

なお、2006（平成18）年度から特殊学級は特別支援学級と名称を変更され、この学級は、とうべつ学園に「ほなみ」として継承されている。

学校評議員

国では2000（平成12）年4月に地域コミュニティの衰退を考慮し、地域の事情に即した学校づくりを目的として、学校長が地域住民や保護者などの意見を反映したり、協力を得て、地域と連携した学校運営を推進するための「学校評議員」を設置することができることとした。

2001（平成13）年11月には西当別中学校、当別中学校、弁華別小学校、当別小学校、西当別小学校に、2002（平成14）年4月には中小屋中学校、蕨岱小学校、東裏小学校、中小屋小学校、弁華別中学校に、それぞれ学

校評議員が設置された。この学校評議員は各学校長の求めに応じて、教育活動の計画や実施、地域社会との連携体制など、学校運営について意見を述べる事が可能となった。学校評議員は地域住民や生徒保護者、有識者から校長が推薦し、当別町教育委員会が委嘱した。

学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の導入

2004（平成16）年6月、国では「地方教育行政法」を改正し、「学校運営協議会（コミュニティ・スクール）」の設置を可能にする内容を盛り込んだ。コミュニティ・スクールは学校、保護者、地域住民の三者により学校運営の改善や生徒の健全育成を検討するための組織である。町では2017（平成29）年に小中一貫教育を実施したが、その中で子どもたちを取り巻く環境や学校が抱える課題の解決には学校と地域の「社会総掛かりでの教育の実現」が不可欠であり、これからの学校では教育課題を地域住民と共有し、地域と共に成長を支える「地域とともにある学校」に衣替えすべきだとして、コミュニティ・スクールを設置することとした。また既存の学校評議員制度は、コミュニティ・スクール制度に移行した。

コミュニティ・スクールの委員には町内会の役員、児童委員、PTA役員、幼稚園長、校長、教頭など地域の代表的存在や教育関係者が委嘱された。主な活動は、校長が作成する学校の重点目標や年間の学校行事計画などについて校長の説明を受けた上での承認や、学校運営に関する意見を教育委員会や校長に意見することであった。

2017年には当別小学校と当別中学校区域に、当別コミュニティ・スクールが設置され、西当別小学校、西当別中学校区域においても小中一貫教育推進などを目的として西当別コミュニティ・スクールが設置された。

スクールバスの運行

町では1973（昭和48）年4月から、青山地区でスクールバスの運行が始まった。その後、小中学校の統合に伴い、スクールバスは町内各地区で行われるようになった。2023（令和5）年度の時点では、蕨岱、金沢・中小屋、東裏、高岡、弁華別、スウェーデンヒルズ、上当別、川下左岸、川下右岸、青山の各地区でスクールバスが通年運行されている。



写真6 当別小学校のプールで行われた着衣泳教室の様子
(2019年)

学校プールの整備

町では1966（昭和41）年から1982（昭和57）年にかけて、小中学校でプール設備の建設が進んだが、現在は当別小学校水泳プール（現・とうべつ学園水泳プール）のみが使われている。プール設備の概要は表10の通りである。

表10 プール設備一覧

名称	設置位置	設置時期	工事費（千円）	備考
当別小学校水泳プール	当別小学校敷地内	1966年7月	7,804	1992年 新築
当別町 西当別プール	西当別中学校敷地内	1971年7月	15,280	2007年 用途廃止
当別町 第2プール	当別中学校敷地内	1977年6月	25,630	2003年 用途廃止
当別町 青山中央プール	青山小中学校敷地内	1974年7月		2000年 用途廃止
当別町 東裏プール	東裏小学校敷地内	1979年7月	19,550	2003年 用途廃止
当別町 弁華別プール	弁華別小学校敷地内	1981年7月	30,900	2006年 用途廃止
当別町 中小屋プール	中小屋小学校敷地内	1982年7月	30,070	2003年 用途廃止

資料：当別町教育委員会

※青山中央プールの工事費は不明。

給食センターの設置

町では1965（昭和40）年から牛乳給食が実施されてきたが、多くの町民が完全給食を要望しており、1990年代前半、町の人口増加に伴い完全給食を実施することにした。

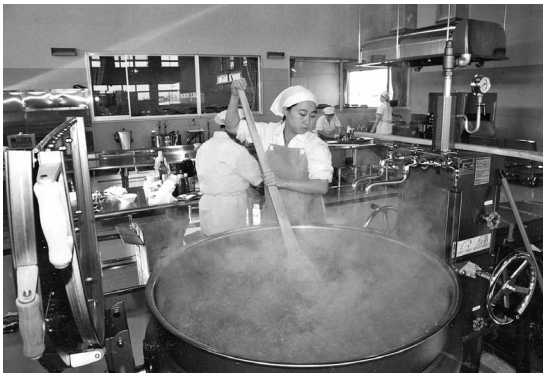


写真7 給食センターで給食の試作をしている様子（1995年）

1994（平成6）年、伊達寿之町長は町政執行の所信として、「今年度から給食配ぜん設備の増築工事を行うほか、平成7年度の給食センター建設を目指し、給食センターの実施設計を行います」と述べた。

給食センターは材木沢（現・若葉）の国道337号沿いに建設され、1995（平成7）年12月12日に完成し、落成式が行われた。総床面積約1100㎡で調理場、事務室、研修室と食品庫、プロパン庫が配備された。調理器具として野菜裁断機、煮炊き釜などが完備され、最大調理能力は一度に3000食となっていた。別棟には学校給食センターとしては初の生ごみ処理施設を

設置した。総工費は8億3000万円を費やした。

1996（平成8）年1月16日、各学校のPTA代表者、学校関係者等約120名が給食の試食を行い、2日後の1月18日から当別中学校、西当別中学校で給食提供が開始され、同月22日から全小中学校（13校）で開始された。また、食材は努めて当別産のものをを使うようにした。

現在は、地元の農家が育てた野菜や当別産の食材を積極的に取り入れ、季節ごとに内容が変わる「とべっこランチ」（月1回）や、姉妹都市交流の一環として、宮城県大崎市や愛媛県宇和島市の食材を用いた給食の提供もしている。

新型コロナウイルス感染症と教育

2019（平成31）年、中国で発生したCOVID-19^{*4}（新型コロナウイルス）は全世界で蔓延し、日本でも2020年以降、感染が拡大した。同年2月27日、安倍晋三首相（当時）が全国教育機関の臨時休校実施を要請したことにより、当別町でも同年4月14日より臨時休校とした。5月6日まで小中学校を休校とし、認定こども園（夢の国、おとぎのくに）については幼稚園の休園と保育園の縮小開設（保育園児等は可能な限り登園自粛）とした。

しかし、感染症拡大の状況から休校期間が当初予定から延期となったため、休校中の各校では対策を講じて学習・健康面での支援を行った。当別小学校では、5月18日にアルコール除菌を行った上で体育館や教室を使い、間隔を空けて体調確認や課題の説明を行った。西当別小学校では6学年を2学年ごとに三つのグループに分けて時差登校を実施し、校舎

*4 新型コロナウイルス感染症の拡大については、第3章第2節を参照



写真8 臨時休校が終わり、授業が再開された時の教室の様子（2020年6月）

玄関で1人ずつ休校中の一日の過ごし方や課題の進捗状況などを確認した。

その後、5月25日より分散登校を実施、6月1日から本格的な授業再開となった。学校活動再開にあたっては、マスクの着用、健康確認、こまめな消毒、換気、ソーシャルディスタンスの確保、いわゆる「三密（密閉・密集・密接）」の回避などを徹底することとした。

また、当別小学校、西当別小学校では2020（令和2）年6月の学校再開後、感染防止対策として児童の清掃活動は教職員が代行していた。同年6月下旬からPTAの保護者が教職員の負担を軽減するため、週4回程度トイレや水飲み場などの除菌、清掃を支援した。

（2）町内の小中学校

本項では当別小学校、西当別小学校、当別中学校、西当別中学校の沿革について記述する。2022（令和4）年4月に開校したとうべつ学園については後述する。

当別小学校

終戦後の1947（昭和22）年、「六・三制」の実施により当別国民学校から当別小学校と改称した。当時、18学級編成で児童数は1054名であった。

1960（昭和35）年8月、第二グラウンドが完成し、同年9月25日には開校記念日が5月20日に制定された。1964（昭和39）年8月31日には特殊学級設置の認可を得て、児童数10名収容の「いなほ学級」が発足した。1965（昭和40）年、牛乳給食が開始された。1966（昭和41）年には校地内に当別町学校プールが設置された。1969（昭和44）年11月11日、屋内体育館が工費約2751万円で落成した。

当別小学校はここまで1920（大正9）年落成の校舎を使い続け、老朽化したため改築の要望が高まり、町では改築事業を実施した。1971（昭和46）年11月20日に新校舎一期工事が完了、1972（昭和47）年に二期工事が完了して、新校舎の完成となった。新校舎は総工費2億6000万円をかけ、鉄筋コンクリート造り3階建て（一部2階建）、延べ4857㎡となった。同年10月30日、開校100周年記念式典と祝賀会が举行された。同年の学級編成は27クラスであった。1973（昭和48）年8月14日には新グラウンドが完成した。

1989（平成元）年には金沢小学校が閉校し、児童11名が編入した。1992（平成4）年11月8日には開校120周年記念式典、祝賀会が開催された。同年5月16日には総工事費約2億3460万円をかけて幅17m、長さ25mの当別小学校水泳プールが完成、オープンした。

1993（平成5）年、沖縄県児童との交流（沖縄県・北海道「青少年ふれあいの翼」交流事業）が実施された。この年普通学級21、特殊学級3の合計24学級となった。また1995（平成7）年から2001（平成13）年まで岩出山町との交流事業も行われていた。

2000（平成12）年にはコンピューター教室が設置された。同年には普通学級19、特殊学級4の合計23学級となった。2012（平成24）年12月19日、開校140周年を記念して祝賀会が同校体育館で開催された。同年、学童保育（プレイハウス）を北校舎2階に開設した。2020（令和2）年にはGIGAスクール1人1台端末を導入した。2021（令和3）年には通常学級12、特別支援学級4の合計16学級となった。

同校は書道の課外活動も優秀で、2021年までに全国書道コンクールで21年連続32回の団体優勝をなし、全国学生書道展では2017（平成29）年までに23年連続33回団体優勝を収めている。

2022（令和4）年3月、小中一貫教育の義務教育学校「とうべつ学園」の開校に伴い、閉校となった。



写真9 当別小学校に完成した体育館（1969年）

表11 当別小学校の歴代校長

代	氏名	在職年月	代	氏名	在職年月
1	鮎田如牛	1873（明治6）年5月～ 1879（明治12）年7月	21	笹川久	1967（昭和42）年4月～ 1970（昭和45）年3月
2	荒砥琢哉	1879（明治12）年10月～ 1880（明治13）年12月	22	野崎武男	1970（昭和45）年4月～ 1974（昭和49）年3月
3	氏家興三郎	1880（明治13）年12月～ 1885（明治18）年9月	23	片桐利春	1974（昭和49）年4月～ 1977（昭和52）年3月
4	福井専之助	1885（明治18）年10月～ 1886（明治19）年4月	24	渡辺秀二	1977（昭和52）年4月～ 1980（昭和55）年3月
5	西川正宏	1886（明治19）年4月～ 1891（明治24）年8月	25	須田通正	1980（昭和55）年4月～ 1985（昭和60）年3月
6	江川洵太	1891（明治24）年8月～ 1892（明治25）年8月	26	平山勲	1985（昭和60）年4月～ 1988（昭和63）年3月
7	宮原英吾	1892（明治25）年9月～ 1893（明治26）年8月	27	奈良孝秋	1988（昭和63）年4月～ 1991（平成3）年3月
8	江川正宏	1893（明治26）年8月～ 1895（明治28）年8月	28	藤島敬次	1991（平成3）年4月～ 1995（平成7）年3月
9	鈴木清治	1895（明治28）年8月～ 1896（明治29）年11月	29	河地良一	1995（平成7）年4月～ 1996（平成8）年9月
10	鈴木信行	1896（明治29）年11月～ 1921（大正10）年10月	30	鎌田正勝	1996（平成8）年10月～ 1999（平成11）年3月
11	本間政治	1922（大正11）年1月～ 1923（昭和12）年1月	31	山本陸男	1999（平成11）年4月～ 2001（平成13）年3月
12	飯野達太郎	1923（大正12）年1月～ 1927（昭和2）年12月	32	外崎靖忠	2001（平成13）年4月～ 2003（平成15）年3月
13	大橋渉	1927（昭和2）年12月～ 1942（昭和17）年1月	33	宮村昭	2003（平成15）年4月～ 2005（平成17）年3月
14	本間忠治	1942（昭和17）年2月～ 1944（昭和19）年7月	34	小野崎昭夫	2005（平成17）年4月～ 2007（平成19）年3月
15	大川正治郎	1944（昭和19）年7月～ 1946（昭和21）年4月	35	稲尾勝美	2007（平成19）年4月～ 2011（平成23）年3月
16	久永善治	1946（昭和21）年4月～ 1952（昭和27）年4月	36	菊地秀夫	2011（平成23）年4月～ 2013（平成25）年3月
17	佐瀬常雄	1952（昭和27）年5月～ 1956（昭和31）年4月	37	菊崎陸裕	2013（平成25）年4月～ 2016（平成28）年3月
18	藤原収二	1956（昭和31）年4月～ 1962（昭和37）年4月	38	西野典男	2016（平成28）年4月～ 2018（平成30）年3月
19	近藤政男	1962（昭和37）年4月～ 1963（昭和38）年4月	39	渡邊久徳	2018（平成30）年4月～ 2020（令和2）年3月
20	小西豊作	1963（昭和38）年4月～ 1967（昭和42）年3月	40	昇洋一	2020（令和2）年4月～ 2022（令和4）年3月

資料：当別町

西当別小学校

西当別小学校は1951（昭和26）年、1896（明治29）年創立の太美小学校と1900（明治33）年創立の獅子内小学校を統合して発足し、同年11月24日、新校舎が完成した。校地面積6000坪、校舎の面積は429坪、総工費5228万8000円であった。開校当初は8学級編成で児童数347名であった。1957（昭和32）年11月8日には校舎増築、屋内体育館が完成した。

1968（昭和43）年5月26日、十勝沖地震で校舎2階部分が半壊となり、使用不能となった。そのため同年11月27日までに災害復旧校舎新築工事を行った。1974（昭和49）年にはNHK学校研究委託校、石複連研究指定校、石教研学校課題研究校にそれぞれ指定され、その成果を発表した。

1981（昭和56）年9月13日、開校30周年記念式・祝賀会が举行され、1982（昭和57）年11月29日には新校舎が完成、1983（昭和58）年12月4日、新体育館が完成した。

1991（平成3）年4月1日、高岡小学校が閉校となり、本校に統合された。1992（平成4）年には道教委の指定により特別活動の教育実践発表会を開催し、1993（平成5）年には石狩管内学校課題発表会を開催した。1994（平成6）年2月20日には増築校舎が完成し、落成式・祝賀会が行われた。このころから、児童数が年々増加し、1992年度は9学級、232名であったのが、1996（平成8）年には18学級582名にまで増加した。そのため、1996年11月8日には校舎が増築され普通教室8、音楽室、図工室が完成した。



写真10 西当別小学校の授業風景（2023年）

1997（平成9）年4月1日、「たんぽぽ学級」が設置された。2001（平成13）年9月9日、開校50周年記念式・祝賀会が举行された。2006（平成18）年度、文部科学省指定の「小中連携事業（生徒指導）」（2カ年計画）、「子ども待機スペース交流事業」（オアシス）の実践校となった。2007（平成19）年には国際理解教育を開始し、ALTを導入した。

2010（平成22）年5月、新学校農園が稼働した。7月にはESD日米教員プログラムが開始され、児童との交流学習が行われた。2017（平成29）年には小中一貫教育（施設分離型）が開始され、同年11月には西当別コミュニティ・スクールが開始された。

表12 西当別小学校の歴代校長

代	氏名	在職年月	代	氏名	在職年月
1	山下一二三	1951（昭和26）年8月～ 1955（昭和30）年5月	15	中山昭弘	1991（平成3）年4月～ 1995（平成7）年3月
2	井上治雄	1955（昭和30）年5月～ 1956（昭和31）年4月	16	美馬幸	1995（平成7）年4月～ 1998（平成10）年3月
3	相蘇芳太郎	1956（昭和31）年4月～ 1960（昭和35）年3月	17	工藤時恭	1998（平成10）年4月～ 2001（平成13）年3月
4	西忠義	1960（昭和35）年4月～ 1963（昭和38）年3月	18	小野健次	2001（平成13）年4月～ 2003（平成15）年3月
5	棟方正臣	1963（昭和38）年4月～ 1964（昭和39）年7月	19	山内秀治	2003（平成15）年4月～ 2006（平成18）年3月
6	原武司	1964（昭和39）年8月～ 1967（昭和42）年3月	20	斉院仁	2006（平成18）年4月～ 2009（平成21）年3月
7	小林正夫	1967（昭和42）年4月～ 1970（昭和45）年3月	21	千葉祐一	2009（平成21）年4月～ 2011（平成23）年3月
8	井上治雄	1970（昭和45）年4月～ 1972（昭和47）年3月	22	河野修一	2011（平成23）年4月～ 2013（平成25）年3月
9	福島辰雄	1972（昭和47）年4月～ 1976（昭和51）年3月	23	柳田卓哉	2013（平成25）年4月～ 2015（平成27）年3月
10	藤原信義	1976（昭和51）年4月～ 1979（昭和54）年3月	24	樟山行彦	2015（平成27）年4月～ 2017（平成29）年3月
11	岸本渡	1979（昭和54）年4月～ 1982（昭和57）年3月	25	難波雅弘	2017（平成29）年4月～ 2019（平成31）年3月
12	斎藤貞昭	1982（昭和57）年4月～ 1986（昭和61）年3月	26	伊東優子	2019（平成31）年4月～ 2022（令和4）年3月
13	吉原孝	1986（昭和61）年4月～ 1989（平成元）年3月	27	八木橋桂二	2022（令和4）年4月～ 2024（令和6）年3月
14	雨宮敬次	1989（平成元）年4月～ 1991（平成3）年3月	28	潟沼史朗	2024（令和6）年4月～ 現職

資料：当別町

当別中学校

当別中学校は1947（昭和22）年5月1日、新制中学校として開校した。

当初の校舎は、旧当別小学校の正面、北側校舎の階上を使用し、当別、



写真11 当別中学校の運動会の様子（1989年）

材木沢、川下、蕨岱、東裏、金沢、中小屋の7小学校区域を通学区域とした。しかし、中小屋地域は遠距離で通学が困難であったため、中小屋小学校に分校を設置した。

中小屋分校は、1952（昭和27）年8月31日に独立した。1955（昭和30）年4月1日には三番川、四番川が当別中学校の分校として開校。三番川、四番川は1958

（昭和33）年4月1日、独立した。

1948（昭和23）年9月、当別中学校校舎建設期成会が発足し、翌1949

(昭和24)年、校舎の建設用地を旧競馬場跡地とすることを決定した。校舎は1952年3月末に完成した。1966(昭和41)年4月、ときわ学級(特殊学級)が開設された。

1967(昭和42)年、当別川の切替工事のために校舎を移転することとなり、新たな用地は下川通125番地と決定した。移転にかかる工事は1969(昭和44)年に実施され、同年11月、新校舎が完成した。校舎建設と同時に陸上競技場と野球場も設置された。

1972(昭和47)年野球部が石狩支庁野球大会で優勝し、さらに全道大会に出場、全道制覇を成し遂げた。同年の陸上大会では、女子100mで全道優勝し、全国6位の好成績であった。女子100mと女子400mリレー



写真12 当別中学校で開催された「校舎とお別れする会」(2022年3月)

表13 当別中学校の歴代校長

代	氏名	在職年月	代	氏名	在職年月
1	本間忠治	1947(昭和22)年5月～ 1948(昭和23)年1月	15	三浦武雄	1987(昭和62)年4月～ 1990(平成2)年3月
2	久永善治	1948(昭和23)年1月～ 1948(昭和23)年4月	16	平澤雄司	1990(平成2)年4月～ 1992(平成4)年3月
3	工藤定一	1948(昭和23)年4月～ 1952(昭和27)年5月	17	山口英明	1992(平成4)年4月～ 1994(平成6)年3月
4	井村為次	1952(昭和27)年5月～ 1953(昭和28)年11月	18	藤中彰二	1994(平成6)年4月～ 1997(平成9)年3月
5	菊地次郎	1953(昭和28)年11月～ 1956(昭和31)年3月	19	清水雅之	1997(平成9)年4月～ 2000(平成12)年3月
6	近藤政男	1956(昭和31)年4月～ 1959(昭和34)年4月	20	浅見晴宣	2000(平成12)年4月～ 2003(平成15)年3月
7	平井春雄	1959(昭和34)年5月～ 1961(昭和36)年4月	21	高橋憲康	2003(平成15)年4月～ 2005(平成17)年4月
8	高砂正清	1961(昭和36)年4月～ 1963(昭和38)年3月	22	本多総夫	2005(平成17)年4月～ 2008(平成20)年3月
9	花山輝敏	1963(昭和38)年3月～ 1966(昭和41)年3月	23	須川康寛	2008(平成20)年4月～ 2011(平成23)年3月
10	浅見晴夫	1966(昭和41)年4月～ 1973(昭和48)年3月	24	柳原忠広	2011(平成23)年4月～ 2012(平成24)年3月
11	高橋五郎	1973(昭和48)年3月～ 1976(昭和51)年3月	25	中川剛	2012(平成24)年4月～ 2014(平成26)年3月
12	成瀬旭	1976(昭和51)年4月～ 1981(昭和56)年7月	26	厚海嘉孝	2014(平成26)年4月～ 2016(平成28)年3月
13	常田昭拓	1981(昭和56)年8月～ 1984(昭和59)年3月	27	武岡則夫	2016(平成28)年4月～ 2019(平成31)年3月
14	寺岡功	1984(昭和59)年4月～ 1987(昭和62)年3月	28	中村伸次	2019(平成31)年4月～ 2022(令和4)年3月

資料：当別町

は全道大会で優勝した。1977（昭和52）年、当別町学校プールが設置された。同年9月には町内5中学校合同で開校30周年記念式典を挙行了。1973（昭和48）年、寄宿舎が廃止されスクールバスの運行が開始された。1975（昭和50）年から1982（昭和57）年ころまで、岩出山中学校と修学旅行を通じての交流活動が行われた。

1981（昭和56）年7月、中体連管内大会で野球部が優勝し、全道大会に出場した。1982年9月、吹奏楽コンクール札幌地区大会でブラスバンド部が金賞を受賞した。吹奏楽部はこれ以降、たびたび優秀な成績を収めている。1985（昭和60）年、中体連全道大会に卓球部、陸上競技部が出場し、卓球部は全国大会に進出した。翌年9月、パーソナルコンピューターが導入された。1998（平成10）年12月、心の教室相談室が新設され、1999（平成11）年4月、心の教室相談員が配置された。

2005（平成17）年3月、中小屋中学校が閉校し、本校に統合された。2007（平成19）年、柔道部が全国大会に出場し、2018（平成30）年1月には第18回北海道中学校新人剣道大会で、剣道部が男子団体戦準優勝を果たした。

2022（令和4）年3月、小中一貫教育の義務教育学校「とうべつ学園」の開校に伴い、閉校となった。

西当別中学校

西当別中学校は1947（昭和22）年5月4日、当別村立西当別中学校として獅子内小学校に併設する形で開校し、同年7月には町制施行に伴



写真13 西当別中学校の授業風景（2023年）

い、当別町立西当別中学校となった。1971（昭和46）年7月には同校敷地内に町民プールが落成した。1973（昭和48）年1月、高岡、ビトエ、川下地域などを通るスクールバスの冬季運行が開始された。1977（昭和52）年9月、開校30周年記念式典が町内中学校合同で行われた。1979（昭和54）年12月、新体育館が総工費9147万2000円を以て完成した。

1980（昭和55）年12月には新校舎第一期工事が完成、1981（昭和56）年10月には新校舎第二期工事が完成し、同年11月新校舎落成記念

式典が執り行われた。

1989（平成元）年10月、第1回国際交流学習が行われ、スウェーデンヒルズから講師を招き交流を深めた。1994（平成6）年8月、韓国、台湾、香港から留学生を招き、国際交流学習が実施された。1997（平成9）年、国際交流を体験し、国際的知見を深めることと交流を目的に、本校から2年生4名と教諭1名がスウェーデン王国レクサンド市を訪問した。同年2月全国中体連スキー大会回転で優勝した。同年11月北海道インターナショナルスクール（HIS）を招いて国際交流学習を実施した。1998（平成10）年9月には心の教室相談員が配置された。

1999（平成11）年6月から校舎増築工事が着工し、翌年2月完了した。同年10月には国際交流が実施されスウェーデン、レクサンド市高校生と交流学習が行われた。

2001（平成13）年9月当別町青少年レクサンド市派遣研修が行われた。生徒数は1990年代後半から増え始め、1997年には8学級、1998年4月には9学級、2001年には10学級編成となった。

2015（平成27）年8月、電子黒板、書画カメラが設置された。2017（平成29）年4月、小中一貫教育が開始された。同年9月当別町レクサンド市姉妹都市交流30周年記念訪問が実施された。2021（令和3）年2月、GIGAスクール構想関連工事が行われ、同年5月、電子端末の1人に1台の利用が開始された。



写真14 西当別中学校の卒業式（1997年）

表14 西当別中学校の歴代校長

代	氏名	在職年月	代	氏名	在職年月
1	渡辺徹	1947（昭和22）年5月～ 1955（昭和30）年5月	15	高田哲嗣	1992（平成4）年4月～ 1995（平成7）年3月
2	原薫	1955（昭和30）年5月～ 1957（昭和32）年4月	16	新野靖史	1995（平成7）年4月～ 1997（平成9）年3月
3	倉島繁	1957（昭和32）年4月～ 1959（昭和34）年6月	17	三澤昭彦	1997（平成9）年4月～ 1999（平成11）年3月
4	高砂正清	1959（昭和34）年7月～ 1961（昭和36）年3月	18	朝日均	1999（平成11）年4月～ 2001（平成13）年3月
5	大滝正夫	1961（昭和36）年3月～ 1964（昭和39）年4月	19	佐藤治	2001（平成13）年4月～ 2003（平成15）年3月
6	野崎武男	1964（昭和39）年4月～ 1966（昭和41）年8月	20	太田洋一	2003（平成15）年4月～ 2006（平成18）年3月
7	伊藤貢	1966（昭和41）年8月～ 1968（昭和43）年10月	21	小西稔	2006（平成18）年4月～ 2009（平成21）年3月
8	佐藤晴之	1968（昭和43）年10月～ 1976（昭和51）年6月	22	杉本祐治	2009（平成21）年4月～ 2012（平成24）年3月
9	山岡弘明	1976（昭和51）年6月～ 1979（昭和54）年4月	23	杉山健	2012（平成24）年4月～ 2014（平成26）年3月
10	奈良孝秋	1979（昭和54）年4月～ 1982（昭和57）年3月	24	菅原裕之	2014（平成26）年4月～ 2018（平成30）年3月
11	大塚満直	1982（昭和57）年4月～ 1985（昭和60）年3月	25	野村誠	2018（平成30）年4月～ 2020（令和2）年3月
12	佐藤達夫	1985（昭和60）年4月～ 1989（平成元）年3月	26	大浦浩	2020（令和2）年4月～ 2023（令和5）年3月
13	千田浩史	1989（平成元）年4月～ 1990（平成2）年8月	27	森聰	2023（令和5）年4月～
14	西野英男	1990（平成2）年9月～ 1992（平成4）年3月			

資料：当別町

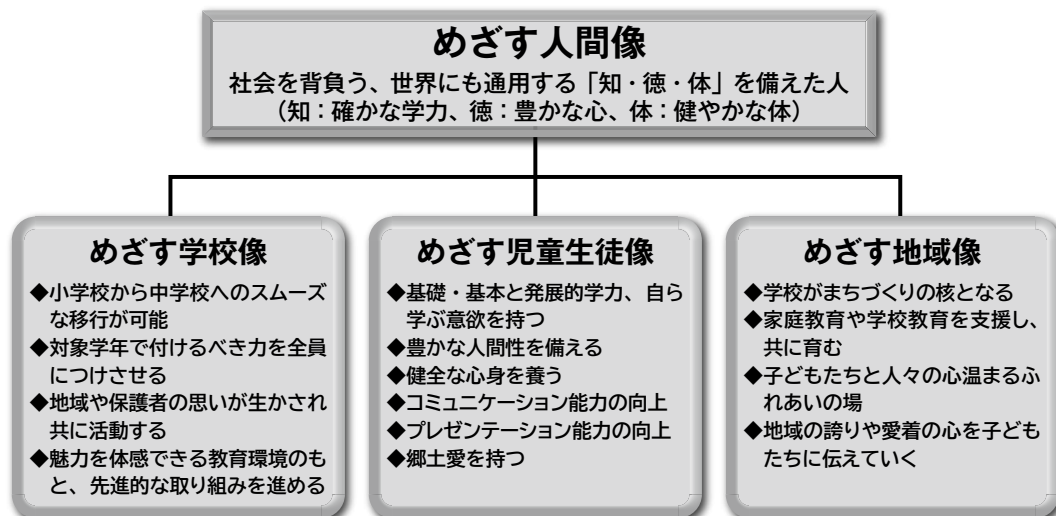
(3)「とうべつ学園」

小中一貫教育の推進

2014（平成26）年、町は小中一貫教育事業の取り組みを始めた。北海道教育委員会から指定を受け、当別小学校、当別中学校が連携し、義務教育9年間を見通した指導のあり方などを研究する「当別小中ドリカムプロジェクト」が行われた。2014年度は小中合同研修会の実施、道内外の先進地視察研修、保護者向け「家庭学習の手引」の作成などを行った。

2015（平成27）年3月には「当別町小中一貫教育に関する取組基本方針」を策定した。これは2014年に策定された「第4次当別町生涯学習推進計画」に基づいて作成されたもので、一貫教育でめざす「人間像」、「学校像」、「地域像」、「児童生徒像」をそれぞれ打ち出し（次頁図2）、これらを基本的な方針として一貫教育を推進するとした。そして、同方

図2 小中一貫教育でめざす方向性



資料：『広報とうべつ』 2017年3月号

針により当別町内の全小学校、中学校で小中一貫教育の実施、義務教育9年間で連続した教育課程の編成、地域の特色を反映した教科の導入、学校・家庭・地域が一体となった教育の推進などを実施するとした。

2015年度からは教育委員会や各学校で実施された内容や一貫教育に関する情報の共有を図るため『とうべつ一貫教育かわら版』の発行を開始した。その後、「小中一貫教育懇談会」を開催し、当別地区、西当別地区で保護者説明会を実施するなど学校側、家庭側、地域側の立場から協議が行われた。

2017（平成29）年4月から当別小学校、西当別小学校、当別中学校、西当別中学校で、併設型の小中一貫教育が開始された。主な活動としては小中合同道徳・いじめ撲滅集会、小中合同芸術鑑賞会、西当別小学校、西当別中学校への学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の設置、小中合同体力テストであった。

2019（令和元）年には6月に当別小学校と当別中学校でスポーツフェスティバルが開催された。

「一体型義務教育学校」構想の策定

2018（平成30）年度の町政執行方針において、『『未来を担う子どもの育成と町民が幸せに暮らせる社会の形成』に係る施策の展開』が掲げ

られ、「小中一貫教育の基本理念をフルに活かすために必要な『一体型小中一貫校』の新設に向けて作業を進める」とした。

教育委員会では当別小学校と当別中学校を統合した9年制の「一体型義務教育学校」を設置する基本構想（案）を取りまとめた。同年7月10日、当別町総合保健センターゆとろで同構想案の住民説明会を行った。「9年間の教育課程によって基礎学力や発展学力の定着を目指す」「5学年より一部教科担任制を導入する」等との説明を行った。校舎の建設候補

地は、当時老朽化していた下川町の当別中学校跡地を活用することとした。

2019（平成31）年には開校を2022（令和4）年度を目標とし、校舎やグラウンド施設などに関する基本設計を作成した。当別の田園風景に調和したシンプルで力強いデザインとし、児童の年齢に応じた使いやすさを追求した。また、災害などに強い構造とした。



写真15 とうべつ学園の音楽の授業（2023年）

体育館はバスケットボールコート2面分を設置し、グラウンド施設には300mトラック、ソフトボールを兼ねた野球場、サッカーコートを設置することとした。校舎には高所に設置する窓である「ハイサイドライト」と、仕切りのない吹き抜け空間である「インナーガーデン」を採り入れ、各フロアに自然光と風を取り込むことができる開放的な空間に設計した。

校舎は当別産の木材がふんだんに使用された温かみのあるもので、体育館の他に町内の学校では初となる武道場を設置することとした。

インナーガーデンには大階段と階段状に連続した「ステップテラス」を設置し、子どもたちの多様な学びや地域開放に対応したデザインとした。また、各教室前には「ワークスペース」を設置し、学校図書、コンピューター室の機能を備えた「メディアライブラリー」も設けた。

同年5月28日には一体型義務教育学校開校に向けて必要な事項を検討、議論する「開校準備委員会」と「教育課程編成委員会」を開催した。

「とうべつ学園」の開校

2020（令和2）年には学校名を「当別町立とうべつ学園」とすること

を決定した。学校名は開校準備委員会であらかじめ公募した学校名の中から五つを選定し、当別小学校、当別中学校の小学3年生以上の生徒が投票を行って決定した。学校名には「当別小と当別中が一体となった学校にふさわしい」という思いが込められていた。

とうべつ学園に関する資金として、学校の設計、工事、校歌、校章などにふるさと納税寄付金を活用した。

2020年8月下旬に建設工事が開始され、着工に先立ち8月23日にはとうべつ学園建設工事安全祈願祭が執り行われた。

校歌は作詞を西下航平氏、作曲を当別中学校OBでチェロ奏者の高木慶太氏が手掛けた。校章は原案を当別中学校美術部が製作し、八つの原案から「義務教育学校開校準備委員会」と教育委員会で選定して、佐々木舞弥氏の原案が選ばれた。



写真16 開放的なとうべつ学園の教室

2022（令和4）年4月8日、とうべつ学園の開校式が執り行われた。本庄幸賢教育長から中村伸次初代校長に校旗が授与され、とうべつ学園の8、9年生が校歌を歌った。陸上トラックは2022年度に完成し、野球場と多目的グラウンドは2023（令和5）年12月に完成した。

〈とうべつ学園校訓〉

優しく 強く（やさしく つよく）

当別町立とうべつ学園が、子どもたち一人ひとりの個性と優しさ、思いやりの心に溢れ、互いに認め合い、信じ合い、切磋琢磨しながら強い意志をもって学び続ける意欲の礎を築く場となることを願い「優しく強く（やさしく つよく）」を校訓として掲げた。また、この校訓は、小中一貫教育基本方針のめざす子ども像、基本理念に掲げた子どもたちにつけさせたい力を端的に表現した。

〈教育目標〉

夢と志を持ち 希望に満ちた未来を拓く子どもの育成

高い志と確かな学力をはぐくむ（知）

思いやりの心と豊かな人間性をはぐくむ（徳）

たくましい身体と心をはぐくむ（体）

表15 とうべつ学園の歴代校長

代	氏名	在職年月
1	中村伸次	2022（令和4）年4月～ 2023（令和5）年3月
2	吉村公孝	2023（令和5）年4月～ 2025（令和7）年3月
3	桂川淳	2025（令和7）年4月～

資料：当別町

（4）閉校した小・中学校

弁華別小学校

1892（明治25）年5月、当別尋常小学校として創立された。1897（明治30）年、当別尋常高等小学校第1分教場と改称した。1905（明治38）年、当別第1尋常小学校と校名を変更、独立した。1941（昭和16）年4月、国民学校と改称した。



写真17 弁華別小学校の交通安全教室の様子（1994年）

1947（昭和22）年、6・3制実施により高等科を廃止し、弁華別小学校となった。同年7月1日、町制施行に伴い、当別町立弁華別小学校と改称された。

昭和30年代から昭和40年代にかけて、管内で道德教育充実の機運が高まった。弁華別小学校は1965（昭和40）年、管内初の道德教育研究指定校となり、1966（昭和41）年に第10回学研教育賞、1968

（昭和43）年に石狩教育長賞をそれぞれ受賞している。

弁華別小学校では子どもが学校のメインでなくてはならないとして、「一座建立」という教育理念を掲げ、学校教育実践を行った。よく解る授業、楽しい学校生活、児童が通いやすい学校づくり、子どもの積極性の向上、読書力をつける学習、基礎的学力の向上、父母への公開発表会などを行った。

1975（昭和50）年4月、青山小学校を統合した。1981（昭和56）年4月、児童数減により5学級編制となり、2・3学年が複式学級となった。2014（平成26）年2月、教育委員会は地元住民の要望を受け、弁華別小学校を当別小学校に統合する方針を明らかにした。同年9月14日、全校児童15名が描いた絵などの映像を校舎に投影するプロジェクションマッピング

が実施され、幻想的な音楽が流れる中、木造校舎に映し出された。

2015（平成27）年11月8日、閉校記念式典が行われ、2016（平成28）年3月、弁華別小学校は閉校となった。

太美小学校

1896（明治29）年の創立で、当別尋常小学校第3分教場であったが、1900（明治33）年に校舎を移転新築し、当別尋常高等小学校第2分教場となった。1930（昭和5）年に高等科を併置し、太美尋常小学校となり、戦後に太美小学校となった。1951（昭和26）年に獅子内小学校と統合され、西当別小学校として発足した。

金沢小学校

1898（明治31）年2月11日、当別尋常高等小学校第三分教場として字金沢宅地29線4番地の払い下げを出願し、1899（明治32）年9月に許可されて23坪の校舎を新築した。1905（明治38）年9月、当別尋常高等小学校金沢分教場と改称、1923（大正12）年10月金沢尋常小学校として独立した。

1947（昭和22）年、学制改革で金沢小学校と改称された。1961（昭和36）年、121坪の校舎を新築・移転し、翌年8月には屋内体育館も完成した。1978（昭和53）年12月3日、開校80周年記念式典を開催した。

1982（昭和57）年、石狩管内教育実践奨励表彰を受賞し、1988（昭和63）年には当別高岡小学校と集合学習を実施した。また当別小学校、川下小学校、青山中央小学校と交流学习を行うなど、他校との交流事業も活発であった。同年10月29日、開校90周年を祝い「祝う会」を実施し、タイムカプセルを埋蔵した。1987（昭和62）年ころから各地区やPTA会などで議論が行われ、1989（平成元）年3月に当別小学校に統合された。



写真18 金沢小学校の上棟式（1961年）

獅子内小学校

1900（明治33）年に、京坂農場内に仮校舎を設け、当別尋常高等小

学校第5分教場として発足した。1904（明治37）年、寄付された土地に校舎を移転新築し、翌年に当別尋常高等小学校獅子内分教場と改称した。戦後に獅子内小学校となった。1951（昭和26）年に校舎を火災で全焼したことを契機として、太美小学校と統合され、西当別小学校として発足した。

当別高岡小学校

1900（明治33）年、満岡縫蔵氏が畑地900坪を校地として寄付し、同年工費266円をもって約17坪の校舎1棟を新築した。1901（明治34）年



写真19 当別高岡小学校の校舎全景（1943年）

1月15日の創立で、当別尋常高等小学校第6分教場として発足した。1905（明治38）年8月8日、当別尋常高等小学校高岡分教場と改称した。1908（明治41）年尋常科6年制の実施により児童数が増加し、校舎を増築した。1916（大正5）年4月、分教場を廃止し、高岡尋常小学校と改称した。

1947（昭和22）年4月1日、当別高岡小学校と改称し、高等科は廃止となった。1950（昭和25）年2月、西当別中学校高岡分校を併置した。1953（昭和28）9月、171坪の新校舎、40坪の屋内運動場の移築が完了した。1959（昭和34）年、屋内体育館を新築し、翌年旧屋内運動場を教室20坪、校具室8坪等に改修する工事が完成した。西当別中学校高岡分校については、1968（昭和43）年をもって、西当別中学校に統合された。

1982（昭和57）年3月、石狩管内実践奨励賞を受賞した。1990（平成2）年6月、開校90周年閉校記念連合大運動会が実施され、1991（平成3）年に西当別小学校に統合された。

中小屋小学校

中小屋小学校は浄土真宗本願寺派の中小屋説教所（超願寺）と浄土真宗大谷派の説教所（観蓮寺）を前身として始まり、1900（明治33）年2月20日、当別尋常高等小学校第四分教場に昇格した。1914（大正3）年4月1日、中小屋尋常小学校として独立した。

1947（昭和22）年に中小屋小学校と改称された。1952（昭和27）年10月、工費819万円をかけて総坪数275坪の校舎を新築した。1966（昭和41）年9月16日、部落一同により白黒テレビ6台、図書、電気オルガン、バス木琴、鼓笛バンド楽器などが寄贈された。

1980（昭和55）年4月26日には郷土学習として「にれの子タイム」が開始された。1996（平成8）年9月13日、校舎が火災で焼失したため、4日後の9月17日から中学校校舎の一部を借りて授業を再開した。1998（平成10）年3月2日に新校舎が完成し、落成式が行われた。1999（平成11）年6月13日、開校100周年記念中小屋大運動会が、10月24日に開校100周年記念小中合同学芸文化祭がそれぞれ開催され、11月13日には開校100周年記念式典、祝賀会が行われた。

2006（平成18）年3月、児童数の減少により閉校し、当別小学校に統合された。



写真20 交通安全を呼びかける中小屋小学校の児童（1986年）

青山小学校

1901（明治34）年3月、民家を借り受け、青山簡易教育所として設置された。1902（明治35）年、草ぶき校舎21坪を建築した。1905（明治38）年1月2日に全焼したため、民家1棟を借りて授業を開始し、同年8月工費426円をもって校舎1棟30坪を完成させた。1907（明治40）年、農業補習学校を付設。翌年、青山教育所と改称した。1917（大正6）年、青山尋常小学校と改称、1941（昭和16）年、青山国民学校と改称した。1943（昭和18）年10月、それまで単級であったのが、2学級となった。

1947（昭和22）年、青山小学校と改称した。1961（昭和36）年12月、85坪の体育館が完成し、校舎裏地5反を部落で購入した上で町に寄付し、グラウンド用地とした。1968（昭和43）年には単複教育を大学の研究に取り入れるために、北海道教育

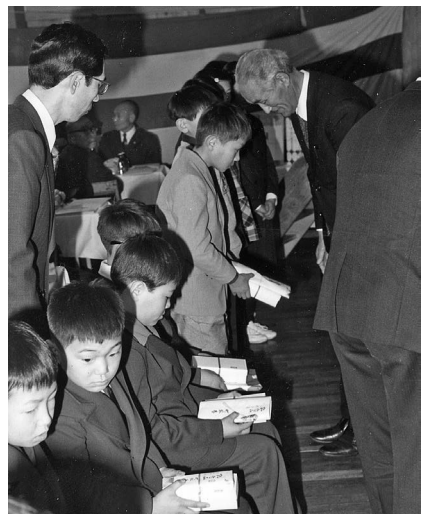


写真21 青山小学校の閉校式の様子（1975年）

大学から協力校の委託を受けた。教授の来訪を受けて意見交換をするとともに、教育実情を提示し、資料のとりまとめなどで、4年間協力した。

その後、児童減少に歯止めがかけられず、1975（昭和50）年3月26日閉校式が行われ、閉校となった。

青山中央小学校

明治中期、北海道では簡易教育所が他県に比べて多く設置されていた。1901（明治34）年創立の青山奥簡易教育所も、その一つである。



写真22 青山中央小学校の校舎

1900（明治33）年、野村農場旧事務所を借り、地元住民の松本丈八氏を嘱託教員とし、臨時授業を開始した。そして1901年3月20日、創立となった。1909（明治42）年3月に当別第3尋常小学校と改称、1916（大正5）年3月に青山奥尋常小学校と改称している。

1939（昭和14）年4月、修業年限2年の高等科を併置し、青山奥尋常高等小学校と改称した。1941（昭和16）年4月、国民学校となり、5月部落名の変更に伴い青山中央国民学校と改称し、戦後、青山中央小学校となった。

1947（昭和22）年5月1日、弁華別中学校青山中央分校を設置し、単級編制で中学校教育を開始した。1954（昭和29）年10月5日、校舎を全面的に改築した。

1968（昭和43）年11月8日、学研教育賞を受賞した。1972（昭和47）年、スクールバスの運行が開始され、1973（昭和48）年、四番川小学校が本校に統合された。1975（昭和50）年4月1日、二股小中学校が本校に統合となり、児童生徒数105名となった。同年9月17日、新校舎建築工事が着工し、1977（昭和52）年12月1日に新校舎が落成した。1978（昭和53）年11月4日には新体育館が完成した。

青山中央小学校では特色ある教育活動が活発に行われていた。地域の自然環境を活用した教育活動として、「山菜採り」を実施し、収穫物を老人ホーム「長寿園」に持っていくボランティア活動や道民の森の「野鳥観察会」「植樹会」に参加する自然体験活動、「学園農園」での植物、野菜の栽培を行う栽培活動が、それぞれ実施されていた。

また社会科室等を活用した教育活動、資料室を活用した社会科、理科の学習活動が行われた。極小規模の弱点を克服するための教育活動としては、札幌市立創成小学校、弁華別小学校、中小屋中学校との交流学習などが実施された。開かれた学校を目指した活動として、地域住民と行う運動会や学芸発表会、囲碁同好会、婦人学園への学校施設の開放活動が行われた。

活発な学校事業を展開してきたが、地域の過疎化と当別ダム建設計画が浮上したことで学区の人口減少が進み、1999（平成11）年10月17日、閉校記念式典を実施し、2000（平成12）年3月24日に閉校式を行った。

東裏小学校

東裏小学校は1901（明治34）年10月19日、村内有志で東裏32線北2番地の竹田孫八郎氏の小屋を借りたことに始まる。岡田穰氏が教師となり、13名の児童を集めて授業を開始した。

1902（明治35）年1月7日、公立学校の認可を受け、東裏簡易教育所と改称した。1906（明治39）年5月、32線北6番地を校地に選定し、800円余りで34坪の校舎を新築した。1913（大正2）年9月、校舎を31坪増築し、東裏尋常小学校と改称して、独立した。

1947（昭和22）年4月1日、学制改革により東裏小学校となった。1959（昭和34）年12月には、ブロック建築による新校舎が完成した。総面積は172坪余で、当時は町で唯一のブロック造りであった。1965（昭和40）年に部落有志、PTA、校長により「東裏小学校校舎完成期成会」が発足し、完全校舎建築のための増築工事が行われた。

1972（昭和47）年9月10日、開校70周年記念式典と祝賀会が挙行された。1978（昭和53）年、プール建設を町に要請し、翌年7月屋根付きプールが完成した。

1982（昭和57）年に6学級編制となったが、その後児童数が減少し1986（昭和61）年より4学級編制となり、1989（平成元）年、3学級編成の完全複式となった。1991（平成3）年、蕨岱小学校、川下小学校と



写真23 東裏小学校の運動会の様子（1979年）

ともに、少人数の学習効果を高めるために体育、特別活動を中心とした集合学習に参加した。2002（平成14）年、開校100周年記念式典・祝賀会が開催された。2008（平成20）年3月、閉校となった。

二股小学校

二股小学校は1904（明治37）年7月1日、字青山奥番外地の石本農場内に仮校舎を設置して、児童6名に授業を開始したことに始まる。1913



写真24 二股小学校の開校70周年記念式典（1974年）

（大正2）年10月に新校舎を設立した。新校舎は総坪数約42坪、経費は550円であったが、うち275円が寄付であった。1917（大正6）年4月1日尋常小学校と改称、1941（昭和16）年に二股国民学校と改称した。

1947（昭和22）年4月1日、二股小学校と改称した。部落民の支援があり、教室の増築、教員住宅建設、農村電話、校

内電気設備設置などが行われ、1966（昭和41）年にはPTAの寄付により各種遊戯施設が設置された。

学級編制は1947年度までは単級であり、1948（昭和23）年度に2学級となり、1965（昭和40）年度に3学級となった。1960（昭和35）年ころには生徒数が100名を超したが、その後離農者増加の影響で1975（昭和50）年3月に閉校した。



写真25 川下小学校の特別教室の落成式（1968年）

川下小学校

川下部落の形成当初は、樹木が鬱蒼と茂りヒグマが出没するため、人馬の通行が容易ではなかった。そのため、当別小学校まで児童を通学させることができなかった。1904（明治37）年3月27日、地元有志から寄付を受けて校舎を建設し、当別尋常高等小学校出張所の名で開校、同年4月1日より授業を開始した。1905

（明治38）年、川下簡易教育所と改称。さらに1917（大正6）年4月1日、

川下尋常小学校と改称し、独立した。

終戦後の1947（昭和22）年4月、学制改革により川下小学校と改称した。1956（昭和31）年5月、新校舎が竣工した。1957（昭和32）年より3学級となり、昭和40年代には6学級（単式）となった時代もあったが、児童数の減少により2004（平成16）年に閉校した。

四番川小学校

1906（明治39）年、四番川部落の入植が始まり、1908（昭和41）年に22戸となった。増加した児童に教育をほどこすため、部落有志が協議し、同年6月に約12坪の校舎を建設した。松本亘氏を教師に任命し、尋常小学校レベルの授業を開始した。これが四番川小学校の礎となった。

1909（明治42）年10月15日、当別第三尋常小学校（後の青山中央小学校）四番川特別教授場となったが、同年10月28日に校舎増築事業の際に出火し、全焼した。このため小倉兵次郎氏所有の空小屋を借り、授業を行った。

校舎が再建築されたのは1910（昭和43）年5月、規模は約16坪であった。その後部落において再度寄付金を募り、寄付金90円50銭を村に寄付して1917（大正6）年に36坪の校舎を新築した。1919（大正8）年4月1日、特別教育規定に則った尋常小学校として独立し、四番川尋常小学校と改称した。1941（昭和16）年4月1日には国民学校と改称した。

1947（昭和22）年2月13日、失火により校舎と付属建物が全焼し、1947年12月15日に総坪数43坪の新校舎が完成した。1951（昭和26）年12月、三番川地区より児童を通学させるために林中孫十郎氏自宅に季節分校を設置し、12月から3月まで出張授業を実施した。1969（昭和44）年度より、単級から2学級編制となった。

しかし、その後、人口減少が進み、1973（昭和48）年には23戸となった。生徒数も減少したため、同年3月青山中央小学校に統合され、3月26日に廃校式が行われた。



写真26 四番川小学校に届いた北海道知事からの図書（1970年）

三番川小学校

当別川上流の山間部に位置した三番川部落は気候に恵まれず、農業者が定着しにくかったため教育活動も安定しなかった。1909(明治42)年、



写真27 三番川小中学校廃校式の様子(1971年)

当別第三尋常小学校三番川特別教授場として設置されたものの、人口流出の影響で1925(大正14)年4月四番川小学校に統合され、一時的に廃校となった。

終戦後、緊急開拓地に指定されて、入植者が増加した。そのため1951(昭和26)年1月、鈴木利助氏宅を仮教場とし、四番川小学校から教諭が出張して授業を開始した。同年11月5日、四番川小学校

の分教室となった。1952(昭和27)年9月15日に校舎が完成し、同年10月28日三番川小学校として独立した。校地7315坪、校舎約64坪で、工費は170万円であった。

1962(昭和37)年からは電気設備が供用を開始し、同年へき地学校給食が開始された。札幌市立伏見小学校と姉妹校として提携し、交流活動を行った。1965(昭和40)年度に2学級編制となり、翌年以降は単級であった。1971(昭和46)年、部落全戸が集団離農することに伴い、閉校となった。

蕨岱小学校

蕨岱小学校の校区の児童は当初、当別小学校に通学していた。しかし遠距離であったため、有志が学校誘致運動を起こし、当別尋常高等小学



写真28 増築された蕨岱小学校の校舎(1967年)

校蕨岱特別教授場として、1911(明治44)年4月に発足した。1919(大正8)年4月1日、当別尋常高等小学校から独立して、蕨岱尋常小学校と改称した。

1923(大正12)年12月、旧校舎南方に33坪の校舎が建設された。1937(昭和12)年3月、解体された弁華別小学校の古材を譲り受けるとともに、部落から寄付金約300円余りを募り、校舎北側に

24坪の屋内体操場を建設した。

終戦後、緊急開拓計画により入植者が増加し、児童数も激増した。そのため教室、付属廊下、玄関などの増築を計画し、1949（昭和24）年10月に完成した。経費約10万円は部落寄付によるもので、また全部落民が労力奉仕に参加した。

1958（昭和33）年、校舎全面改築のために改築期成会を結成、12月20日に完成した。1971（昭和46）年9月、開校60周年記念式典が挙行された。1979（昭和54）年、長年にわたるユニークな全校集会活動、日記指導が評価され石狩管内教育実践奨励表彰入選校となった。

1989（平成元）年5月には勤労体験学習（米作り）の取り組みを開始した。1991（平成3）年9月、開校80周年式典・祝賀会が開催された。

2003（平成15）年から3年間、札幌市立幌北小学校5年生との交流を行った。その後、離農や少子化で児童が減少していることから、2006（平成18）年11月に閉校記念式典・祝賀会が開催され、2007（平成19）年3月に閉校となった。

材木沢小学校

1915（大正4）年、地元住民有志の寄付により校舎を建設し、当別尋常高等小学校材木沢特別教授場が開設した。1919（大正8）年には材木沢尋常小学校となり、1920（大正9）年には66名と児童数も増えたことから、1921（大正10）年と1937（昭和12）年には校舎を増設した。

戦後は材木沢小学校となったが、地域の人口減少が進み、1960（昭和35）年には児童数の減少により、当別小学校材木沢分校となった。1963（昭和38）年に校舎を移転改築した。その後、さらなる児童数の減少により、1965（昭和40）年3月、当別小学校に統合された。



写真29 材木沢小学校の運動会の様子（1961年）

青山中央中学校

1947（昭和22）年5月1日、弁華別中学校青山中央分校として創設された。当時は、青山中央小学校に併置されていた。1952（昭和27）年7



写真30 1967年に完成した青山中央中学校の寄宿舎

月1日独立し、青山中央中学校と改称した。1954（昭和29）年6月、校舎全面改築工事に着手し、同年10月5日に完成した。

1967（昭和42）年、四番川中学校を統合した。1972（昭和47）年10月30日スクールバスの運行が開始された。1975（昭和50）年9月から新校舎建設工事が開始され、1977（昭和52）年に新校舎が完成

した。小規模校、小中併置校の特色を生かし、札幌市立創成小学校などとの交流学习を推進するなど、教育実践が評価され、1988（昭和63）年度の石狩管内教育実践奨励表彰を受賞した。また、「道民の森」の各種事業への参加や老人ホーム「長寿園」へのボランティア活動にも取り組んだ。人口減少や当別ダム建設の影響により、2000（平成12）年3月、閉校となった。

中小屋中学校

1947（昭和22）年6月2日、中小屋小学校の旧高等科教室を利用して開校した。1948（昭和23）年12月までに合計15坪の教室を設け、1949（昭



写真31 中小屋中学校の生徒たち（1984年）

和24）年には3学級となった。1952（昭和27）年、旧校舎を解体し、モルタル2階建校舎が竣工した。

1978（昭和53）年12月には、鉄筋コンクリート造の校舎1501㎡、体育館649㎡が完成した。1979（昭和54）年12月には校舎落成記念式典、祝賀会が執り行われた。

1976（昭和51）年、1977（昭和52）年、1978（昭和53）年の3年連続で、バトミントン部が全道大会に出場した。また1984（昭和59）年7月陸上部が全道大会に出場した。

2006（平成18）年3月、当別中学校に統合される形で閉校となった。

弁華別中学校

1947（昭和22）年、弁華別国民学校の高等科が廃止され、同年5月1日、当別村立弁華別中学校が創立された。当初、教室は弁華別小学校の裁縫室、階下西端の1教室を利用した。1948（昭和23）年7月に本校建設期成会、同年12月に建設委員会が組織され、1949（昭和24）年5月30日、平屋3教室（約103坪）の独立校舎が完成した。小学校とのグラウンド、体育館の共用には支障が多かったため、1955（昭和30）年8月、校地を移転し、約252坪の新校舎が完成した。

その後、1986（昭和61）年12月に新たな校舎、体育館が完成した。2007（平成19）年には、国際協力機構主催の国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト学校賞を受賞し、また北海道が主催した税をテーマとしたポスターで北海道知事賞奨励賞を受賞した。同年、平成18年度全日本学校関係緑化コンクールの学校林等活動の部で特選（農林水産大臣賞）に選ばれ、表彰を受けた。

2010（平成22）年2月、全国中体連スキー大会に2年生が出場した。2013（平成25）年全国中学校人権作文コンクールで感謝状を受賞した。2014（平成26）年にはユネスコスクールの加盟承認を受けた。このように課外活動も盛んであったが、2016（平成28）年3月に閉校となった。



写真32 弁華別中学校の体育館落成記念バスケットボール大会（1986年）

二股中学校

1953（昭和28）年9月1日、青山中央中学校二股分校として、二股小学校に設置された。1963（昭和38）年4月1日、独立校となった。創立当時は全学年で1学級であったが、1962（昭和37）年に2学級となった。生徒数の減少に伴い、1975（昭和50）年4月1日、青山中央中学校に統合された。



写真33 二股小中学校に贈られたオーバーヘッドプロジェクター（1979年）

(5) 幼稚園

当別幼稚園

1957（昭和32）年、佐々木竜之介氏により私立当別幼稚園が設立され、1965（昭和40）年6月1日、同園は町に移管され、町立当別幼稚園として開園した。町立の当別幼稚園は当時、当別小学校に併置され、3学級でスタートし、園長は当別小学校校長が兼務した。



写真34 当別幼稚園の入園式（1996年）

1972（昭和47）年に独立園舎が新築され、定員は140名となった。定員は1973（昭和48）年に150名、1974（昭和49）年には225名（6学級編成）と増加した。1975（昭和50）年に当別幼稚園と鉄北幼稚園に分離した。これにより当別幼稚園の定員は130名となった。

1977（昭和52）年、当別幼稚園、鉄北幼稚園で各園数の規定を外したことで定員が230名となったが、その後の園児数減少により1985（昭和60）年には年長児1学級、年少児2学級編成となった。1989（平成元）年には全学級で2学級編成となった。

1994（平成6）年に当別幼稚園、鉄北幼稚園の園長兼務を廃止し、鉄北幼稚園に専任園長を配置したが、2004（平成16）年には再び1人の園長により両幼稚園を兼務する体制となった。2005（平成17）年当時の在園児童数は表16の通りであった。

2006（平成18）年4月、当別幼稚園と鉄北幼稚園が統合され、鉄北幼稚園の園舎を使用することとし、園名は「当別幼稚園」とした。年少・年長各2学級、合計4学級編成の複数学級となり、多様な活動が展開できるようになった。また、統合に伴い、副園長制度を取り入れた。その後、2016（平成28）年4月「認定こども園 当別夢の国」*5として新たに開園した。

*5 認定こども園 当別夢の国への移行、および認定こども園 おとぎのくにについては、第3章第1節を参照

表16 当別幼稚園の児童数（2005年）

年齢	4歳児	5歳児
組名	たんぽぽ	こすもす
男	9	8
女	9	21
計	18	29
合計	47	

資料：当別町教育委員会

鉄北幼稚園

前述のように、鉄北幼稚園は1975（昭和50）年4月1日、当別幼稚園から分離して開園した。定員100名（3学級）でのスタートであった。園舎が完成するまでの間は旧青山小学校の校舎を利用し、バス通園を行っていたが、1975年8月に園舎が完成した。



写真35 完成間近の鉄北幼稚園（1975年）

1982（昭和57）年、園児の減少により2学級編成となった。1983（昭和58）年、町都市計画整理事業との関連で園庭整備、固定遊具、花壇、飼育コーナーなどが移設された。翌年には図書コーナーが設置され、図書貸し出しが開始された。1985（昭和60）年、園児増加により年少組を1学級増加し3学級編成とした。2005（平成17）年当時の在園児童数は、表17の通りであった。

鉄北幼稚園は2006（平成18）年、当別幼稚園と統合され、園名は「当別幼稚園」となった。

表17 鉄北幼稚園の児童数（2005年）

年齢	4歳児	5歳児
組名	さくら	あじさい
男	13	17
女	13	14
計	26	31
合計	57	

資料：当別町教育委員会

（6）当別高等学校

町立高校発足まで

町では定時制高校設置の陳情を行った結果、設立認可となり、1949（昭和24）年3月1日北海道立江別高等学校当別分校として開校した。定時制普通科一学級を当別小学校に併置し同年4月2日に入学式を行い、4月5日より授業開始となった。

1950（昭和25）年3月31日、学区変更により道立札幌西高等学校当別



写真36 当別高校の校舎

分校と改称、同年10月26日に新築された当別中学校に移転しその校舎を使用した。1952（昭和27）年11月1日、市町村学校設置認可臨時特例により北海道当別高等学校と改称、独立した。1955（昭和30）年ころから全日制高校設置の機運が高まり、町、町議会も積極的に取り上げるようになった。

1959（昭和34）年9月13日、町議会で当別高校独立校舎建築議案が可決された。学校用地は東小川通84番地となり、1959年12月に第一期工事が竣工し、2階建4教室と職員室が完成した。1960（昭和35）年7月には残りの教室も竣工し、野球場、陸上競技場も同時に完成した。1961（昭和36）年1月、全日制普通課程（3学級）の設置が認可され、同年4月1日より全日制（定時制併置）の町立高校として発足した。

その後、設備の改善、教室の増築などを行い、1964（昭和39）年3月31日付で道立に移管された。

農業科の設置

1967（昭和42）年全日制普通科の1学級を家政科とし、定時制普通科を農業科に転換した。

1975（昭和50）年度入学生からは、農業科のカリキュラムを大きく変更した。それまで1学年で24単位、4年間で96単位取得となっていたものを、1学年で28単位、3年間で84単位取得とした。4年次では総合実習6単位を修得させることとし、その他の期間は、先進農家への委託宿泊実習、農業後継、農業経営に必要な知識、技術、資格を取得するための公共研修機関、各種学校などで実施する専攻実習に割くこととした。

1978（昭和53）年には開校30年を記念して記念式典、祝賀会が行われた。1980（昭和55）年7月15日からは校舎改築工事が始まり、1983（昭和58）年3月15日に完成し、新校舎の使用を開始した。

多彩な学びのコース

1989（平成元）年度から定時制課程修業年限が3年制または4年制と

なった。1991（平成3）年4月、全日制家政科と定時制農業科にコース制を導入し、全日制家政科に教養コースとデザインコースを設け、定時制農業科に園芸科学コースと食品流通コースをそれぞれ設定した。1993（平成5）年6月23日にはスウェーデン、レクサンド市から中高生12名が来校し、部活動などを体験した。

2008（平成20）年4月、全日制課程園芸デザイン科が設けられ、2009（平成21）年3月末、定時制課程農業科は閉課となった。2021（令和3）年4月「北海道CLASSプロジェクト（地学協働活動推進実証事業）」研究指定校（3年間）となった。



写真37 腐葉土を作るために、白樺緑地で落ち葉拾いを行った当別高校園芸デザイン科の生徒たち（2024年）

（7）北海道医療大学

東日本学園大学の創設

東日本学園大学設置の背景として、1970年代の道内の医師不足という問題があった。道内では無医村地区が多くあり、医師、薬剤師の人口が全国平均を大きく下回っていた。この医療従事者不足問題を改善すべ



写真38 北海道医療大学のキャンパス

く北海道知事や有識者が問題に取り組んでいた。そして、有識者が懸念する問題の一つに医療従事者の養成機関の不在があった。1972（昭和47）年7月、札幌市中心部で歯科医院を開業していた歯科医の渡邊^{うくる}享氏は、音別町に大学を設置するべく同町を視察した。2カ月後には渡邊氏を委員長とする準備委員会が発足し、大学名は当時の北海道知事である堂垣内尚弘氏が「東日本学園大学」と命名した。

医学部、歯学部、薬学部の開学を目指し、音別町に教養課程校舎を設置し、専門課程校舎と歯学部附属病院を当別町に設置することとした。

1974（昭和49）年4月に、現在の金沢地区の町有地を取得し、大学用地とした。町有地は当初平坦な土地ではなかったために、4年ほど客土事業が行われた。

学園設置準備は1972年から始まり、1974年2月18日の薬学部設置認可を受け、学校法人東日本学園大学が創設された。同年4月23日、薬学部第一期生の入学式が行われ、入学者141名が音別町（当時）にある教養部（音別キャンパス）の門をくぐった。

歯学部設置と施設の近代化

歯学部設置については、歯学部設置準備委員会を発足させ、引き続き文部省認可に向けて取り組みを行った。堂垣内知事、北海道歯科医師会、道内全212市町村の賛成意見書を文部大臣あてに提出するなど、歯学部設置への機運が高まった。1976（昭和51）年4月の申請では文部省の第一次審査をクリアし、10月10日、歯学部専門校舎と附属病院の起工式が当別校内で行われた。

1978（昭和53）年2月、文部省の2次審査で歯学部が正式に認可された。同年4月、歯学部第一期生149名が入学した。2年間の教養課程を音別キャンパスで学び、専門課程の4年間を当別キャンパスで過ごすこととなっていた。なお歯学部の第一期生は1984（昭和59）年実施の歯科医師国家試験で、全員合格となった。

当別キャンパスの開校

1978（昭和53）年10月、当別町の歯学部校舎、附属病院の供用が開始され、同年12月には歯学部附属病院が開院した。歯学部附属病院は道内の私立大学では初めてのもので、大学教育、歯科医学教育だけではなく

く、地域医療、地域福祉の向上が期待された。

当別キャンパスの付帯設備として、1979（昭和54）年3月に体育館兼講堂、総合グラウンドが完成した。1982（昭和57）年3月、ラジオアイソトープと放射線関係の施設、機器などを総合的に管理し、これらを諸分野の研究、教育のための共同利用に提供することを目的としてアイソトープ研究センターを設置した。

1987（昭和62）年1月、旧教養学部、旧薬学部、旧歯学部の各図書室が統合され、総合図書館が供用を開始した。1988（昭和63）年11月、動物実験センターが完成した。1984（昭和59）年、文部省が歯科衛生士専門学校設置を正式に認可し、同年5月22日、1期生16名が入学した。1985（昭和60）年には音別キャンパスが閉校した。1986（昭和61）年11月からは、公開講座を開校した。

1991（平成3）年7月、文部省は大学設置基準を大幅に簡素化、大綱化した「新大学設置基準」を発表した。これは大学設置基準を従来のものよりも寛容なものにするものであったが、同時に大学間の競争を激化させることとなった。東日本学園大学では前年の1990（平成2）年から、大学運営の方策を検討する「21委員会」を発足させ、大学の運営方針について意見を求めた。

1992（平成4）年12月、看護福祉学部設置を文部省に申請し認可され、翌年4月、看護学科80名、医療福祉学科141名（医療福祉専攻90名、臨床心理専攻51名）の学生が入学した。1994（平成6）年4月、大学名を「北海道医療大学」とした。同年5月医学科研究センターが設置された。

国際交流事業では、1991年10月にカナダのアルバータ大学薬学部と、1993（平成5）年ころから上海鉄道医学院と、1996（平成8）年、看護福祉学部とアメリカ・ニューヨーク州立大学バッファロー校看護学部、社会福祉学部との間で、それぞれ合意書が締結された。

その後、学部・学科や大学院研究科の新增設等を経て、2025（令和7）年度現在は次頁表18・表19のような教育研究体制となっている。また、歯学部附属歯科衛生士専門学校を併設している。

2023（令和5）年9月、北海道医療大学は北広島市へのキャンパス移転を発表した。

表18 北海道医療大学の学部・学科

学部	学科
薬学部	薬学科
歯学部	歯学科
看護福祉学部	看護学科
	福祉マネジメント学科
心理科学部	臨床心理学科
リハビリテーション科学部	理学療法学科
	作業療法学科
	言語聴覚療法学科
医療技術学部	臨床検査学科

表19 北海道医療大学の大学院の研究科

研究科	専攻課程
薬学研究科	薬学専攻博士課程
歯学研究科	歯学専攻博士課程
看護福祉学研究科	看護学専攻修士課程・博士課程
	臨床福祉学専攻修士課程・博士課程
心理科学研究科	臨床心理学専攻修士課程・博士課程
リハビリテーション科学研究科	リハビリテーション科学修士課程・博士課程
医療技術科学研究科	臨床検査学修士課程・博士課程

地域活動

2002（平成14）年5月、青少年活動センターが北海道医療大学の学生と町民の交流、地域福祉貢献を目的として弥生に開設された。同施設は2001（平成13）年12月に町商工会が主催した町と学生との懇談会の場で、学生が町内の空家をボランティア活動の拠点としたいと要望した。

この話し合いが契機となり、大学は「当別町青少年活動センター設立企画書」を作成した。町の教育委員会、福祉課と具体的な話し合いを進め、当別町社会福祉協議会、当別町ボランティアセンターとの連携、学生と町民のボランティアの連携について協議を行うなどの準備を行い、開設の運びとなった。町内の空家を活動センターの拠点に選んだのは、「商店街の活性化に寄与するため」、「活動を継続するための自立的な運営基盤を確立するため」という理由であった。

当別町青少年活動センターは学生のボランティア活動の場だけではなく、地域の人々の集いの場、交流の場としての機能を持っており、地域

づくり、地域福祉を学ぶ学生が集った。活動センターでは、福祉施設で制作されたアクセサリーなどの販売、軽食物の販売を行った。このボランティア活動は、2003（平成15）年、文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム」に選定された。

2005（平成17）年、「NPO法人当別町青少年活動センターゆうゆう24」が北海道医療大学卒業生により設立され活動を開始した^{*6}。

*6 「ゆうゆう」のその後については、第3章を参照



写真39 当別町青少年活動センター

第3節 社会教育

(1) 社会教育の変遷

戦後の社会教育

終戦後、連合国軍最高司令官総司令部の民間情報教育局の主導により教育の民主化政策が推進され、社会教育も学校教育と並んで制度の整備が進んだ。1945(昭和20)年10月、文部省に社会教育局が復活し、1949(昭和24)年には社会教育法が制定された。同法では社会教育の定義を「学校教育活動を除いた青少年及び成人に対して施される組織的教育活動」とした。戦前の社会教育では青年団などの団体活動が中心であったが、戦後の社会教育では施設整備に重きが置かれた。すなわち、戦後復興や郷土意識を育む中核的拠点として各自治体での公民館設置が推奨され、また、図書館法(1950年)や博物館法(1951年)の制定によって、社会教育施設整備も進められた。

当別町では、社会教育法の制定に先立ち、10名が社会教育委員として北海道庁長官から委嘱されていたが、この10名は1949年に解任となり、1950(昭和25)年2月、社会教育法により定数を15名、任期を2年とした新たな社会教育委員が任命された。

その後、1965(昭和40)年に国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)で「生涯教育」の理念が提唱され、世界的に認知されることとなった。1981(昭和56)年には文部省が、「生涯教育」を「国民一人ひとりの人生の充実を目的とした学習行為の促進を教育制度全般によって行うため

の基本的理念」であるとし、また、「生涯学習」は一人ひとりが人生の各機会を充実させるために行う教育活動で、自身に適した学習内容と方法を選択できるものとされた。

その対象範囲は学校教育、社会教育、家庭教育、文化事業、スポーツ、趣味、レクリエーション、ボランティア活動など多岐にわたり、教育的要素を見出せる



写真40 子ども会リーダー研修会の様子(1966年)

ものを多く含んでいる。

戦後の社会教育は教育行政を主体とした学習の場の提供に重きを置いていたが、1960年代後半から提唱された「生涯教育」では、学習する参加者の主体性を重視するようになった。社会教育事業では生涯学習という言葉をよく用いるようになり、1990（平成2）年には生涯学習促進を目的として、「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」（生涯学習振興法）が制定された。

当別町の方針・計画

第1節で述べたように、当別町は1973（昭和48）年に初の長期的な町政運営の指針となる当別町総合開発計画を策定し、社会教育施設として図書館などの充実、社会教育団体の指導者層の充実、一般住民が利用可能な体育施設の不在を課題として挙げた。

その後、町は1980（昭和55）年に当別町総合開発新計画を策定したが、その中で「社会教育の充実」を掲げ、青少年教育や成人教育、芸術・文化の3項目それぞれについて、基本方針・主要施策を示した。

1992（平成4）年4月の当別町第3次総合計画でも「社会教育の充実」を掲げたが、新たに「スポーツ・レクリエーション」、「コミュニティ活動」が掲げられ、社会教育施設の整備推進やリーダーの育成・確保、コミュニティ活動の助長が主要施策として挙げられた。

これらの社会教育の施策が生涯学習の名のもとに統合されるのは、1999（平成11）年度に始まる当別町第4次総合計画に示された教育計画からである。この計画において、「社会教育の充実」は「生涯学習の推進」となり、施策の柱として「生涯学習体系の構築」、「青少年教育の充実」、「社会教育の充実」、「スポーツ・レクリエーションの充実」が項目として挙げられた。

2009（平成21）年度に始まる当別町第5次総合計画に示された教育計画では、「生涯学習の推進」を第一の施策の柱として掲げた。また関連する計画として、当別町生涯学習推進計画（後述）、当別町社会教育推進計画、当別町協働の



写真41 親子ソフトボール大会（1994年）

指針が挙げられた。

また2015（平成27）年に策定された当別町教育大綱において、社会教育の目標を「全ての町民が幸せを感じることのできる生涯学習社会の実現を目指す」とした。

その後2020（令和2）年策定の当別町教育大綱では、「幸せを実感できる生涯学習社会の実現」を掲げ、「すべての町民が「住んでよかった町 当別」を実感できるよう、学習・文化 活動・スポーツに親しむことのできる環境づくりを行う」としている。

生涯学習推進計画

当別町教育委員会は1999（平成11）年、第4次総合計画の中で生涯学習推進計画を策定した。その後の2004（平成16）年には、第2次計画となる「当別町生涯学習推進計画－とうべつプラン21「まなび」」を策定した。これは人生を豊かなものにすることを目的として「学ぶ「芽」を大切にします」、「学ぶ「力」を育みます」、「学ぼうとする「心」をひろげます」という三つの基本理念を掲げ、策定された。重点施策として「家庭教育」、「地域教育」、「幼児教育」、「開かれた学校づくり」、「特色ある学校づくり」、「基礎基本の定着」、「特別支援教育の確立」、「青少年教育」、「成人教育」、「芸術と文化」、「歴史と伝統」、「図書館機能の充実」、「生涯スポーツ」、「学校教育と社会教育の連携・融合」が設定された。

同プランは2008（平成20）年度で終了し、2009（平成21）年度より5年計画の「第3次当別町生涯学習推進計画」を策定し、推進することとなった。計画策定は町内の各種団体関係者、一般公募の人々で構成された「当別町生涯学習推進計画策定委員会」で行われた。基本目標は「ふ



写真42 IT社会に対応した教育が小学校の段階から行われている

れあいから学びの輪へ「川、森、人の恵みのまち当別」の創造」とした。学校、家庭、社会の連携を重視し「学校支援」、「家庭・子育て支援」、「社会・地域支援」を重要だとした。また、「自己のライフプラン これからの推進すべき方向性」を「乳幼児期」、「少年期（小学校～中学校）」、「少年期（高等学校など）」、「青年期」、「成年期」、「壮年期」、「熟年期」を

設定し、各世代に適応した支援策を策定した。

2014（平成26）年には、「第4次当別町生涯学習推進計画」が策定され、町の生涯学習の基本的な方向性を示す町民共通の指針と位置付けられた。策定の背景として、子どもの自然体験、社会体験の不足、家庭教育の充実、高齢者への施策、IT社会への対応の必要性が挙げられ、「あらゆる機会に、あらゆる場所に」において学習することができ、その効果を適切に生かすことができるような施策と体制づくりを目指すこととされた。

その後の生涯学習推進計画は、当別町教育基本計画（2020年度から2024年度まで）における社会教育施策に引き継がれることとなった（第1節の教育基本計画を参照）。

（2）社会教育活動

青少年活動・子ども会活動

当別町では1946（昭和21）年、茂平沢、材木沢、中小屋、東裏、高岡などで、社会教育活動の中心となる青年団が結成され、各地区での青年団結成を受け、当別町連合青年団が結成された。青年団は戦後の民主主義社会発展を目指して研究会、共同作業、奉仕作業、行事などを行った。発足当時は運営資金が乏しかったことから、演芸会、陸上競技、弁論大会などを実施し、その後は神社境内の児童遊園施設の奉仕作業、成人式開催への支援、公民館建設運動の推進青年問題研究集会などの活動を展開した。卓球、バレーボール、陸上競技などのスポーツ大会、他市町村の青年団との交流、各種研修会、リーダー研修会なども行った。1970（昭和45）年には、当別町で全道青年大会が開催された。

しかし、1960年代に高度経済成長が推進されると、青年の多くが札幌などの都市に流出し、団員の減少が生じた。さらに、1970年代に入って若者の農業離れが一層進み、地区においては解散に至る青年団も生じた。こうした状況を受け、1973（昭和48）年には当別町連合青年団の改組が行われ、個人加盟の当別町青年会が発足した。

1975（昭和50）年に創立30周年の記念事業として、「とうべつ太鼓」を結成し、各種イベントで披露してきた。1980（昭和55）年に当別町で開催された全道青年祭で最優秀賞に輝き、全国大会に出場した。

1985（昭和60）年に個人加入から単位段連合体制に改組して、当別町青年団体協議会となった。その後の会員の減少により、1998（平成

10) 年3月に活動を休止した。

一方1965（昭和40）年には、社会教育関係団体の連絡打ち合わせ会において、町での青少年の健全育成を目的とした地域子ども会の育成を推進するべきとの議論がなされた。その結果、PTA組織の中にある補導委員会活動の一環として、子ども会が誕生した。子ども会の結成状況は表20の通りである（『当別町史』）。



写真43 小中学生Townミーティングの様子（2019年）

1972（昭和47）年には「当別町子ども会育成連合会」が設立された。同会は町内各地区子ども会との連絡調整、町民の意向を結集し、青少年の健全育成に資することを目的として組織された。現在、当別町子ども会育成連合会では青少年の「人間力」を育むために体験活動を重要視した活動を実施しており、ドッジボール大会、新春子どもカルタ大会などの実施やジュニア

リーダーの育成を行っていた。2010（平成22）年度には各地区対抗の「大運動会」を開催し、玉入れやリレーなどで子どもから大人まで幅広い年代の参加を可能としたことで、地域のつながりを感じられる貴重なイベントとなった。

ジュニアリーダーに関しては、家族と離れ、地域のコミュニティセンターで共同生活をしながら通学することにより、自主性や社会性を高めるための「『このころのふれあい通学合宿』in当別」や「小中高大生Townミーティング」「オータムキャンプ」などで育成を行ってきた。

表 20 子ども会結成状況

結成年月日	子ども会名	地域	会員数	結成年月日	子ども会名	地域	会員数
1965年11月14日	3町内子ども会	3町内合同	130	1966年2月27日	東裏ポプラ子ども会	東裏9万坪	30
1965年11月28日	栄町子ども会	栄町	150	1966年4月24日	さいわい子ども会	2町内	85
1965年11月29日	若葉子ども会	9町内合同	180	1966年6月12日	7町内子ども会	7町内	130
1965年12月21日	青空子ども会	5町内合同	60	1966年6月19日	蔵っ子子ども会	蔵岱	60
1966年1月9日	阿蘇子ども会	元町合同	120	1966年7月25日	対雁子ども会	対雁	50
1966年2月12日	8町内子ども会	8町内合同	60	計	11	11地域	1055

資料：『当別町史』

表 21 当別町子ども会育成連合会 加盟団体一覧(2025 年度)

	地区名	会 員 数 (人)
1	白樺町内会子ども会	15
2	北栄町子ども会育成会	36
3	アウル青少年育成会	70
4	西町青少年育成会	36
5	元町青少年育成会	11
6	太美北育成会	47
7	太美南育成部	44
8	当別太・ビトエ・川下育成会	8
9	虹の子育成会	18
10	スウェーデンヒルズ子ども会	47
11	スターライト育成会	71
	計	403

資料：当別町

※2025年8月22日時点で安全共済会に加入の子ども会員数。

4Hクラブ

4Hクラブはアメリカ発祥の農村青少年団体による活動である。4Hとは、HEAD（頭－分別ある計画のための頭の訓練）、HEART（心－誠実と親切のための心の訓練）、HAND（手－優れた有益な能力のための手の訓練）、HEALTH（健康－病気に罹らず楽しく働くための身体の訓練）の四つの頭文字を取ったものである。



写真44 4Hクラブ30周年の記念植樹の様子

町では、農業改良助長法が公布された1948（昭和23）年の翌年となる1949（昭和24）年には、早くも農業改良相談所の指導によって4Hクラブが結成された。活動としては、社会奉仕的活動を主として行った青年団とは異なり、農業に関する身近なことに取り組んだ。具体的には、品種や肥料の改良、堆肥増産や健苗の育成など、農業技術に関する試験・研究、生活改善に関する講習会の実施などであった（『当別町史』）。

設立当時は、全道で641あったクラブも、農業人口の減少や活動の低迷などによって多くが解散や休止したが、町の4Hクラブはその後も存続し、2004（平成16）年の時点では、石狩管内唯一のクラブとなっている。活動は今日でも継続され、2019（平成31）年2月には設立70周年記念式典を挙行了した。

女性団体連絡協議会

当別町では1949（昭和24）年ころから婦人の組織的な活動が行われ、農協や各地区で婦人団体の結成が相次いだ。こうした中、1954（昭和



写真45 婦人大会の様子（1995年）

29）年に当別町婦人団体連絡協議会（以下、当婦連協）が結成された。当婦連協は婦人大会を毎年開催するなど、積極的な活動を行ったが、次第に、単位団体の運営と当婦連協の運営の両方をこなすことが困難となり、1966（昭和41）年3月29日に開催された当婦連協総会で、今後の運営方法が協議され、当別町内の婦人団体を、市街合同婦人会、当別

農協婦人部、西当別農協婦人部の3ブロックに分け、そのブロックの代表者が当婦連協の運営に当たることとし、また、事業も年1回の婦人大会の開催だけに絞ることにした。

その後、上記の単位団体の活動が活発となったことで、当婦連協の役員の組織化が難しくなったため、当婦連協は1967（昭和42）年、自然解散に至った。その2年後の1969（昭和44）年には当婦連協に代わる町の女性団体として当別町婦人団体連絡協議会（以下、当婦協）が結成された。当婦協の目的は町の女性団体の自主的活動を支援し、女性の進歩向上を促し、健全な家庭と社会実現に寄与するために団体相互間の連携を図ることを目的とした。

当婦協は1970（昭和45）年9月に開催された町の開基100年記念式典においてマスゲームを実施し、会員約900名が参加した。また石狩管内の女性大会や研修等に参加するなど、健全な女性社会実現に向けて活動を展開したが、こうした活動の中でも多く実施しているのが「女性のつ



写真46 婦人団体リーダー研修会の様子（1991年）

どい」である。これは当婦協の創設以来、毎年1回開催され、家庭内の問題や北方領土問題のような社会問題に関する講座やレクリエーション活動などを実施している。

当婦協はその後、当別町女性団体連絡協議会と名称を変更した。歴代会長は次頁表22の通りである。2018（平成30）年現在、同会には「当別町生活改善実践グループ連絡協議

会」と「当別音頭を守る会」の2団体が加盟している。

当別町生活改善実践グループ連絡協議会は1973（昭和48）年に設立され、町の農畜産物の付加価値向上のための研究と特産品開発、地域環境美化への取り組み、農村振興に関する学習会への参加、地元農産物を使った料理研究を行っている。

高齢者の生涯学習

わが国で高齢者教育が行政的に位置づけられたのは、1965（昭和40）年から1970（昭和45）年にかけて、文部省によって行われた「高齢者学級」の委嘱事業であった（「高齢者教育の課題と老人大学のあり方に関する一考察」牧野篤）。

町における高齢者教育は、従来生涯学習の一環として「ことぶき大学」の名前で事業が行われた。これは高齢者による生きがいづくりを学習する機会の提供を目的としていた。また北海道医療大学と連携して行っている当別学講座も、高齢者の生涯学習の機会となっていた。

1992（平成4）年度以降では、パークゴルフ、健康体操などの体を動かす活動や文化祭作品作り、手芸、陶芸教室などの文化活動、健康教室や北海道医療大学などと連携した講演会、道内旅行などを実施し、生涯学習の場を参加者に提供している。2019（令和元）年度の参加者は男性6名、女性48名の合計54名で、平均年齢は75.7歳であった。「近隣市町村見学」や「当別今昔物語」など21回の講座が開かれ、そのほかに課外・特別講座として北海道医療大学連携講座などが4回、さらに多世代交流事業として子どもたちと一緒に音楽会やチューリップの球根植えなども行った。また、2022（令和4）年度には、ことぶき大学が全20講座、北海道医療大学連携講座が年間6回、歴史学習講座が年間11回開かれるなどしている。

表 22 当別町女性団体連絡協議会会長

任期	氏名
1969年度～1970年度	皆川寿美
1971年度～1972年度	藤崎ふじよ
1973年度～1975年度	辻野妙子
1976年度	上田梅子
1977年度～1991年度	鮎田光子
1992年度～1996年度	加藤悦子
1997年度～2000年度	平よね子
2001年度～2004年度	村上スミ子
2005年度～2006年度	宮本早苗
2007年度	東谷たまえ
2008年度～2018年度	村上スミ子

資料：『当別町女性団体連絡協議会 創立50周年記念誌』



写真47 ことぶき大学の開講式

スポーツ推進委員（旧体育指導員）

1961（昭和36）年に制定されたスポーツ振興法により、体育指導員は市区町村教育委員会が任命する非常勤公務員となり、地域スポーツの発展に貢献してきた。当別町では1962（昭和37）年に6名が委嘱されて以来、町内のスポーツ振興を支えてきた。2012（平成24）年にはスポーツ推進委員と名称を変更し、2024（令和6）年現在、15名が委嘱されている。

スポーツ推進委員は各種スポーツの実技指導や競技会の審判員として、また「当別スウェーデンマラソン」や「とうべつさわやか駅伝」などのスポーツ大会の運営・ボランティアなど、幅広く活動している。また後述するNPO法人ふれ・スポ・とうべつとも連携している。

（3）社会教育施設

当別町公民館

当別町公民館は当初、当別町体育館として1963（昭和38）年10月に完成した。鉄筋コンクリート造の2階建てで建物面積は1322㎡、敷地面積は4280.86㎡であった。2階には映写室・ステージを完備した700人が入る大会議室が設置されており、当別町公民館として青年・婦人活動など様々な活動に利用された。

1973（昭和48）年1月には図書室を設置し、当初の蔵書数は2000冊であった。1989（平成元）年に当別町総合体育館が完成したことにより、体育館としての役割を終え、その後は当別町公民館として利用されたが、老朽化により2007（平成19）年7月、閉館となった。



写真48 当別町公民館



写真49 当別町公民館での活動の様子

白樺コミュニティーセンター（旧当別町農村環境改善センター）

農村生活の向上を目的とする当別町農村環境改善センターは、1980（昭和55）年12月20日に完成し、翌年1月から利用開始となった。鉄筋コンクリート2階建（一部鉄骨造）で建物面積は1376㎡、総工費は約2億8200万円であった。建物内には、バレーボールやバスケットボール

などができるステージ付きの多目的ホール（385.6㎡）をはじめ、100人規模の会議ができる大研修室（143.1㎡）、調理台3台が整備された調理実習室（65.7㎡）、和室3室（31.5㎡）などが設置された。

2007（平成19）年4月1日、同施設の所管が経済部から教育委員会に移され、同時に名称を「当別町農村環境改善センター」から「白樺コミュニティセンター」に変更した。2016（平成28）年からは、NPO法人「ふれ・スポ・とうべつ」が指定管理者となっている。

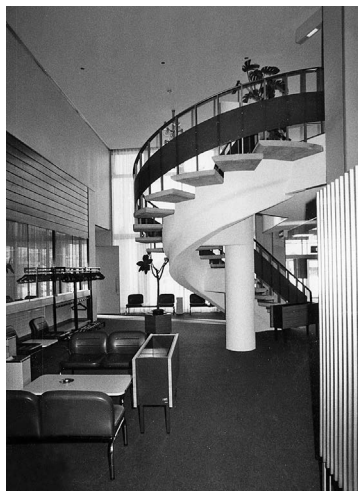


写真50 完成当時の農村環境改善センターの様子（1980年）

西当別コミュニティセンター

1997（平成9）年10月5日、西当別コミュニティセンターがオープンした。宅地開発で人口が増加している西当別地域で、1990（平成2）年に地元住民が地域、生涯学習の拠点施設設置を求めて建設期成会を組織し、町に働きかけた結果、建設となった。西当別地区の生涯学習活動の拠点的施設で、構造は鉄筋コンクリート造平屋建てで2163㎡。総工費は9億5800万円であった。

館内にはバスケットボールコートを有したアリーナ（759.8㎡）、1万冊を収蔵できる図書室（114.4㎡）、大会議室（330㎡）、和室（58.1㎡）、研修室（69.1㎡）、会議室（28.8㎡）、調理室（68.4㎡）が設置された。2025（令和7）年からは、NPO法人「ふれ・スポ・とうべつ」が指定管理者となっている。



写真51 西当別コミュニティセンターの落成式

当別町学習交流センター（旧当別町青少年センター）

当別町青少年センターは、青少年の研



写真52 当別町学習交流センター

修や憩いの場として1977（昭和52）年12月に完成した。鉄骨造、平屋建で、建物面積は337㎡、敷地面積は1691.76㎡であった。施設内には図書室（104㎡）、児童コーナー（28㎡）、閲覧室（30㎡）、郷土資料室（30㎡）が設けられた。2007（平成19）年7月1日に名称を「当別町学習交流センター」に変更し、同時に図書室が併置された。



写真53 世紀会館

世紀会館

地域集会施設として、1970（昭和45）年9月に完成し、1999（平成11）年に改築された。木造平屋建で、建物面積は185.49㎡で、敷地面積は552.56㎡である。館内には洋室（16.20㎡）、集会室2室（68.04㎡）、和室（20.25㎡）、厨房（13.77㎡）が設置されている。



写真54 青少年会館

青少年会館

太美町の住民から1355㎡の土地の提供を受け、1170万円の町費をかけて1970（昭和45）年11月に完成した。体育館、集会室、厨房兼実習室等を備え、青少年の体育、レクリエーション、研修、サークル活動などの拠点として利用された。役場の出張所が併設された時期もあったが、老朽化により2007（平成19）年、閉館となった。



写真55 当別町図書館の館内

当別町図書館

当別町の図書施設として、最初に設置されたのは1973（昭和48）年に建築された当別町公民館内の図書室であった。その後1997（平成9）年10月には、西当別コミュニティセンター内に当別町図書館西当別分館が設置された。

2013（平成25）年7月、町民有志で組

織する「当別ライブラリーファン」が、地域文化の創造を担う施設として教育長に要望書を提出した。要望書では「①公立図書館の設置、②図書館に複数の専門職員を配置する、③計画段階からの住民参加」を訴えた。これを受けて、同年9月、宮司正毅町長は町立図書館設置を検討する方針を明らかにした。その後2015（平成27）年11月には、町民有志が図書館早期建設に関する署名を2330人分集めて町長などに提出した。

2020（令和2）年4月1日、図書館条例が制定されたことで、当別町内の図書室が図書館に変更となった。当別町学習交流センターと西当別コミュニティセンター内の図書室が、それぞれ「当別町図書館」、「当別町図書館西当別分館」となった。図書館設置に伴い、当別町図書館の改築工事が実施され、同年8月1日にリニューアルオープンした。

当別町図書館施設では、2021（令和3）年から2023（令和5）年の間に貸し出し数、利用者数、蔵書数は表23、表24、次頁表25の通りに推移した。

表23 当別町内図書館貸し出し数推移一覧

(単位：冊)

	当別町図書館			当別町図書館西当別分館			合計
	一般図書	児童図書	計	一般図書	児童図書	計	
2021年度	7,641	7,521	15,162	6,611	5,294	11,905	27,067
2022年度	11,231	10,463	21,694	9,522	9,729	19,251	40,945
2023年度	11,144	7,517	18,661	8,773	8,460	17,233	35,894

資料：当別町教育委員会

表24 当別町図書館施設利用者数推移一覧

(単位：人)

	当別町図書館			当別町図書館西当別分館			合計
	一般図書	児童図書	計	一般図書	児童図書	計	
2021年度	2,742	478	3,220	2,192	381	2,573	5,793
2022年度	3,798	636	4,434	3,674	491	4,165	8,599
2023年度	4,292	440	4,732	3,772	544	4,316	9,048

資料：当別町教育委員会

表 25 当別町内図書館施設蔵書数推移一覧

(単位：冊)

図書施設	図書分類	2021年度				2022年度				2023年度			
		購入	寄贈 除籍	年度 増減	累計	購入	寄贈 除籍	年度 増減	累計	購入	寄贈 除籍	年度 増減	累計
当別町図書館	一般図書	338	寄贈54 除籍1,753	△1,361	11,357	410	寄贈126 除籍54	482	11,839	404	寄贈282 除籍1	685	12,524
	児童図書	329	寄贈12 除籍1,937	△1,596	8,362	396	寄贈1 除籍146	251	8,613	376	寄贈2 除籍5	373	8,986
	計	667	寄贈66 除籍3,690	△2,957	19,719	806	寄贈127 除籍200	733	20,452	780	寄贈284 除籍6	1,058	21,510
当別町図書館 西当別分館	一般図書	309	寄贈9 除籍1,524	△1,206	9,310	248	寄贈42 除籍281	9	9,319	293	寄贈76 除籍244	125	9,444
	児童図書	276	寄贈9 除籍1,265	△980	8,475	246	寄贈0 除籍72	△526	7,949	287	寄贈0 除籍6	281	8,230
	計	585	寄贈18 除籍2,789	△2,186	17,785	494	寄贈42 除籍1,053	△517	17,268	580	寄贈76 除籍250	406	17,674
合計	一般図書	647	寄贈63 除籍3,690	△2,980	20,667	658	寄贈168 除籍335	491	21,158	697	寄贈358 除籍245	810	21,968
	児童図書	605	寄贈21 除籍3,202	△2,576	16,837	642	寄贈1 除籍918	△275	16,562	663	寄贈2 除籍11	654	17,216
	計	1,252	寄贈84 除籍6,892	△5,556	37,504	1,300	寄贈169 除籍1,253	216	37,720	1,360	寄贈360 除籍256	1,464	39,184

資料：当別町教育委員会

開拓郷土館

開拓郷土館の開設は、1968（昭和43）年10月の開基百年祭記念事業



写真56 開拓郷土館

審議会では議題とされた各種記念事業の一つであった。各旧家に保存されている開拓当時の貴重な遺品の提供を受けて丁寧に保管、陳列し、先人の苦勞と遺徳を忍び、後世に残すべく設置が進められた。1969（昭和44）年11月17日に着工し、翌1970（昭和45）年5月30日に竣工した。規模は137.48㎡であった。町民の寄贈などによって、移住当時から昭和にいたるまでの生活道具や農機具、化石や鉱石、さらに伊達家ゆかりの貴重な品々など、約2900点が収集され、展示された。

1982（昭和57）年11月、開拓の歴史を伝える当別伊達記念館と伊達邸別館が開館した。一方、開拓郷土館は利用者の減少や建物の老朽化などを理由に2007（平成19）年に閉館した。

当別伊達記念館

当別伊達記念館の建築については、1979（昭和54）年12月に当別町文化調査審議会から町の教育委員会へ具申書が提出された。当時、文化財の展示及び保管は開拓郷土館が担っており、その数は約4000点に及んでいたが、展示スペースが狭く、保管庫の設備も十分ではなかった。

こうしたことから、一般的考古資料や開拓産業民俗資料と、伊達家に関連する文化財資料を分離し、保存するのが望ましいとの意見が同審議会から提出され、これを受けて、伊達邸別館に隣接して当別伊達記念館の建設が決定した。1982（昭和57）年に建てられた同館は、鉄骨造りの平屋建で建物面積は161.59㎡である。館内には1340点の資料が収蔵されている。



写真57 伊達記念館

伊達邸別館^{*7}

伊達邸別館は1880（明治13）年に伊達邦直の命で建築された洋風の2階建て建造物である。1980（昭和55）年に当別町に寄贈され、文化財に指定された。翌年、現在地に移築、復元された。建物面積は92.53㎡で、館内には明治期の生活の様子を復元した展示が行われている。

^{*7} 詳細は第4節を参照



写真58 伊達邸別館



写真59 伊達邸別館の展示

当別町青山交流館

2000（平成12）年に閉校した青山中央小中学校の校舎を、社会教育施設として再利用したものである。建物は1977（昭和52）年に竣工し、鉄筋コンクリート造で建物面積は1285.12㎡である。同施設は青山地域

の社会教育施設として利用されてきたが、利用者の減少や、施設の老朽化に伴って給排水施設の改修が必要とされたことから、2005（平成17）年度から使用が休止となった。

当別町総合体育館

町では従来、屋内体育競技は学校の体育館などを借りて行っていたため、総合体育館建設の要望は強かった。建設工事は1988（昭和63）年



写真60 当別町総合体育館

10月に着工され、翌年10月に完成した。場所は当別町西小川通（現・白樺町）、敷地面積は1万1136.29㎡である。構造は鉄筋コンクリート2階建てで建物面積は4288㎡である。

1階のアリーナは1450㎡で、バスケットボールなら2面、バレーボール（6人制）なら3面で使用できる。アリーナにはステージも設置されており、スポーツ以外のイベントにも利用できるようになっている。また、トレーニングルーム（190㎡）、弓道場（393㎡）を備えている。2階には柔道・剣道の格技場（412㎡）、一周150mのランニングコースを備えている。これらの設備は町内、管内、全道の各種目競技大会、青少年や高齢者のスポーツ大会などに利用されている。

2016（平成28）年からは、NPO法人「ふれ・スポ・とうべつ」が同施設の指定管理者となっている。

中小屋スキー場

町には長年スキー場がなかったが、一部の町民は本中小屋の町有林



写真61 中小屋スキー場で行われた町民スキー大会（1991年）

でスキーを楽しんでいた。1963（昭和38）年、当別スキー連盟が町に陳情し、同年2月24日に第1回町民スキー大会を開催した。同年秋に、民有地であった平地部分を他の町有地と交換する形で整備を始め、町営スキー場として完成した。

1992（平成4）年にはコースの拡幅やリフト、夜間照明を設置するなど大規模

な改修が実施され、その後も継続的に施設の新設や新コース整備などが行われてきた。しかし、入場者数の減少が続いたことにより、2003（平成15）年シーズンから休止状態が継続している。

最盛期であった1996（平成8）年度のリフト輸送人員は9万6773人。休止の前年にあたる2002（平成14）年度は5万2426人であった。

若葉野球場

1977（昭和52）年11月、上当別に完成した野球場である。総工費6300万円をかけ、総面積は1万3000㎡となっている。1973（昭和48）年に当時計画されていた上当別大沢地区の運動場公園建設の一環で設置された。

（4）スポーツ団体^{*8}とスポーツイベント

^{*8} 文化団体については、第4節を参照

当別町スポーツ協会

1947（昭和22）年、当別ではスポーツ団体をまとめ、町民スポーツ振興促進を図ることを目的として当別町体育連盟が発足し、1959（昭和34）年に当別体育協会に改組した。

同協会は発足以来、継続して石狩管内体育大会に参加するとともに、1963（昭和38）年から当別町体育祭（のちに町民体育祭と改称）を開催してきた。特に1998（平成10）年開催の町民体育祭には、同大会最大となる18種目、1718人が参加した。2010（平成22）年2月には、50周年を記念して式典と祝賀会を開催した。

その後、2019（令和元）年、当別町体育協会は当別町スポーツ協会と名称変更した。当別町スポーツ協会に加盟しているのは、2025（令和7）年4月現在、次の16団体である。陸上競技協会、軟式野球連盟、バレーボール協会、弓道連盟、卓球協会、バスケットボール協



写真62 当別町体育祭のパレード（1964年）

表 26 当別町スポーツ協会歴代会長

在任期間(年度)	氏名
1959～1970	近藤辰雄
1971～1973	鈴木梅一郎
1973～1983	戸来秀也
1983～1986	後藤正義
1987～2000	佐々木行雄
2001～現在	宮永雅己

資料：『創立50周年記念誌』（当別町体育協会）

表27 町民体育祭参加状況一覧

年度	参加団体数	参加者数（人）
2010	14	1,214
2011	14	1,235
2012	13	972
2013	13	944
2014	13	1,120
2015	13	1,036
2016	13	975
2017	14	941
2018	14	794
2019	14	747

資料：当別町教育委員会

会、剣道連盟、柔道連盟、スキー連盟、サッカー連盟、相撲国技会、ソフトボール協会、テニス協会、バウンドテニス協会、ミニバレー協会、パークゴルフ協会。

同協会の歴代会長は表26、2010年から2019年までの町民体育祭の参加状況は、表27の通りである。



写真63 当別ウイングス野球少年団のメンバー（2020年）

中学生3名の合計87名となっている。

当別町スポーツ少年団

1978（昭和53）年5月、当別町スポーツ少年団が結成された。

少子化に伴って加盟団体数が減り、2025（令和7）年度には当別ウイングス野球少年団、ベティズJrテニス、FC当別、当別ミニバスケットボール少年団、当別剣道少年団、当別柔道少年団、KIDスキーレーシング少年団の7団体となっている。総団員数は小学生84名、

当別相撲国技会

当別相撲国技会（当時は当別角力愛好会）は、村内で相撲が盛んであった大正末期に発足した。戦前から、毎年8月15日に、当別神社境内で当別神社祭典奉納相撲大会が行われていた。当別出身の力士の一人、

澤辺栄作（若の浦）は全道相撲大会で三役に入り、1933（昭和8）年6月、大日本大相撲大会で全勝優勝し4段を授与されるなど、当別を代表する名力士であった。1934（昭和9）年に引退後、若の浦記念碑が建てられた。

戦後の1964（昭和39）年には、敷地面積64㎡の当別町相撲場が設置され、昭和40年代以降、当別高等学校、北海高等学校の相撲部で活躍した力士が卒業後、市町村対抗選手権や国体予選大会などに出場した。

1979（昭和54）年、子どもの相撲人口拡大、相撲を通じた健全なる心体の育成への寄与を目的として当別町相撲スポーツ少年団が結成された。

当別相撲国技会が主催してきた大会として、当別神社祭典奉納相撲大会と9月20日開催の忠魂祭相撲があった。またお盆に各町内会から小学生、中学生を含めた高校生、一般人による5人で1チームを構成し、競った部落対抗相撲大会（1968年～1977年ごろ）や、当別町、厚田村、新篠津村、北広島市、江別市、浜益村、千歳市、恵庭市、石狩町の参加による5人1チームを選出して開催された道民スポーツ石狩夏季大会があった。

1990（平成2）年8月16日には、当別町開基120年の記念事業の一環として、大相撲当別場所が32年ぶりに開催された。阿蘇公園少年野球場に造られた特設土俵で、若花田、貴花田など人気力士を含む幕下以上の力士320人が取り組みを行い、約4000人の観客で賑わった。



写真64 大相撲当別場所

NPO法人ふれ・スポ・とうべつ

町では2007（平成19）年にスポーツクラブ設立準備委員会を設けて、スポーツ活動をするにあたり町に適した組織と運営方法、財政基盤などについて議論を進めた。2010（平成22）年3月、公益財団法人日本体育協会からの助成も受けて、「当別総合型地域スポーツクラブ」を創設した。その後、同クラブはNPO法人（特定非営利活動法人）格の取得に取り組み、2014（平成26）年6月23日付で「NPO法人ふれ・スポ・とう



写真65 ふれ・スポの成人教室の様子

べつ」(以下、「ふれ・スポ」)が設立された。

町では体育施設を民間の指定管理にすることで、事業者の経営の視点などが利用者が求めるサービス向上につながると考え、2016(平成28)年4月から「ふれ・スポ」に体育施設の業務委託を行った。

2024(令和6)年までに、当別町総合体

育館、当別町白樺コミュニティセンター、とうべつ学園水泳プールの指定管理を受け、事業を行っている。

2024年5月現在、「ふれ・スポ」ではヨガ教室、フィットネスカレッジ、太極拳教室、バトミントン教室など、多様なスポーツ活動を展開している。また、児童の体力や運動能力向上を目的として、小学生などを対象にバトミントン教室や水泳教室などを実施し、学校体力測定支援も行っている。

当別スウェーデンマラソン

2018(平成30)年、スウェーデンヒルズを中心とした当別スウェーデンマラソンが開催された。スウェーデンと日本の外交関係樹立150周



写真66 スウェーデンマラソン(2023年)

年を記念してのイベントだった。翌年にも開催され、新型コロナウイルスの影響で2020(令和2)年と2021(令和3)年は中止となり、2022(令和4)年から再開されている。

種目としてはハーフマラソン(21.0975km)とファンラン(3km)が設定され、ハーフマラソンのコースは当別

スウェーデンヒルズをスタート地点とし、スウェーデンヒルズゴルフ倶楽部をゴール地点とした。2019(令和元)年からはスタート地点、ゴール地点両方がスウェーデンヒルズゴルフ倶楽部に変更された。2024(令和6)年から、スウェーデンヒルズコース(11.9km)が新たに設けられた。

参加枠はハーフマラソンが男女とも高校生以上で、2023(令和5)年からはノンバイナリー(性別にとらわれない)枠が新設された。ファン

ランは男女とも小学生以上から参加可能である。

同大会は、当別町や関係団体等で組織する当別スウェーデンマラソン実行委員会が主催し、大会当日は多くのボランティアが運営に関わっている。2022年の出走者は1312人で、2023年は1602人、2024年は1756人となっている。また2022年からは、当別町内の飲食店や「北欧の風道の駅とうべつ」による飲食販売を実施し、イベントを盛り上げている。

とうべつさわやか駅伝

当別町子ども会育成連合会のイベントとして、2008（平成20）年に始まった。新型コロナウイルス感染症拡大に伴い一時期は開催を中止したが、2025（令和7）年には第17回の大会を開催した。現在は小学生低学年、小学生（男女別）、中学生（男女別）、一般（高校生以上、男女別）、シニア（5人の合計年齢が250歳以上）の各部門に分かれ、毎年9月に開催されている。駅前大通と本通をメインとした一周約1.1kmのコースを1人一周する、5人1チーム（小学生低学年は4人）によるたすきリレーである。2025年は50チーム、272人が参加した。順位だけではなく、仮装賞などの楽しみも提供している。



写真67 とうべつさわやか駅伝（2025年）

第4節 文化財と文化活動

当別町の歴史編さん

当別町では1871（明治4）年に旧仙台藩岩出山一門によって開拓が始まったという史実が、町民の間に連綿と語り継がれてきた。そうした歴史意識の高さは、当別における歴史編さん事業に色濃く反映されてきた。初となる村史は1913（大正2）年刊行の『当別村志 完』だが、これは初の北海道史編さんに先立つこと2年前のことだった。この事実からも、当別における歴史編さんがきわめて早い時期に行われたことがわかる。その後も当別の史誌制作は続けられ、『當別村史』（昭和13年）、『開村七十年』（昭和15年）、『斗魂に燃ゆる当別の歩』（昭和25年）、『伸びゆく当別のあゆみ』（昭和35年）と各時代の姿を記録してきた。

1970（昭和45）年に開拓100年の節目を迎えた当別は、「開基100年記念事業」を推し進め、1世紀におよぶ開拓と発展を支えてきた先人への敬意を込めて地域の歴史を後世に遺すものを目指した。



写真68 100年記念式典の様子（1970年）

町民約7000人が参加した記念式典（1970年9月10日開催）をはじめ、町民憲章・町章・町旗の制定、百年讃歌、記念映画の制作、「当別音頭」のレコード制作がなされ、開拓記念像の建立、当別町開拓郷土館の開館などの事業が行われた。また『当別町史』（1972年刊行）が編さんされ、地域の有志によって各集落史などが編まれた。

（1）指定文化財等

文化財の指定

「当別町指定文化財」選定への前段階として、当別町開拓郷土館の開館は大きな意義があったといえる^{*9}。

当別町文化財の指定は、同館開館のために行われた収蔵品の収集と整理によって準備されたといえる。これら収蔵品などから文化的かつ歴史的意義の高いものを精査、保存し、後世へ意義を継承していくことを目

*9 詳細は第3節を参照

的に、1973（昭和48）年に文化財の選定を始めた。

1975（昭和50）年7月5日、当別町指定文化財として伊達家由来の品々11点が文化財に指定された。その後、1980（昭和55）年11月11日に伊達邸別館、2013（平成25）年3月27日には無形文化財として当別音頭、さらに2022（令和4）年2月16日にトウベツアカマツセイウチ化石が、新たに指定されている。

文化財については表28の通りであるが、特に第1・12・13・14号については、下記に説明する。

表28 当別町指定文化財

番号	文化財名	指定日	概要
第1号	伊達綱宗画筆 三幅対	1975年7月5日	
第2号	打掛（紫色）	1975年7月6日	1675（延宝3）年12月、冷泉家12代当主為清の娘・於妻が、伊達家3代宗親（のち敏親）へ入嫁の際に持参したもの。
第3号	振袖（赤色）	1975年7月7日	
第4号	打掛（白色）	1975年7月8日	1705（宝永2）年8月、冷泉家13代当主為綱の娘・伊世が、伊達家4代村泰へ入嫁の際に持参したもの。
第5号	長はかま及び着物	1975年7月9日	伊達家5代目村緝（1707-1736）が着用したもの。長はかまは、近衛家よりの拝領品。
第6号	のしめ（室内着）及び帯	1975年7月10日	伊達家9代義監（1809-1846）が着用したもの。
第7号	陣羽織	1975年7月11日	
第8号	火事装束（羽織）	1975年7月12日	伊達家10代邦直（1834-1891）が着用したもの。陣羽織は、あざやかな朱色の羅紗で背面には金糸で竹と雀の家紋が刺しゅうされている。火事装束の羽織は、白えりに黒地の打裂羽織である。
第9号	子ども用綿入れ（2組）	1975年7月13日	
第10号	子ども用単衣	1975年7月14日	伊達家11代基理（1862-1891）が幼少時に着用したもの。
第11号	当別開拓の図	1975年7月15日	伊達邦直一行が当別の開拓を行っている状況を描いたもの。作者は、岩出山出身の正蘭。
第12号	史蹟 伊達邸別館	1980年11月1日	
第13号	当別音頭	2013年3月27日	
第14号	トウベツアカマツセイウチ化石	2022年2月16日	

資料：当別町教育委員会

主な文化財

・第1号 伊達綱宗^{つなむね}画筆 三幅対

陸奥国仙台藩の第3代藩主であった伊達綱宗（1640～1711）が、66歳の時に描いた画である。岩出山伊達家への拝領経緯は、第11代目・伊達正人（1886～1974）が1892（明治25）年に三位男爵位を受けた折に、仙台伊達家本藩より御肴料1万疋1折とともに賜った。左は柏雉子^{かしわ きじ}、中央は太公望^{あしえんおう}、右は芦鷺^{あしえんおう}が描かれており、三幅対の大きさは、縦214cm、横60.5cm。



写真69 文化財第1号「伊達綱宗画筆 三幅対」



写真70 文化財第2号「打掛（紫色）」



写真71 文化財第8号「火車装束（羽織）」



写真72 文化財第9号「子ども用綿入れ（2組）」

伊達家では代々、正月や祝い事などの際に床の間に飾るなどして大切に受け継がれてきたが、現在は当別神社が預かり保存している。複製が、当別伊達記念館に展示されている。

・第12号 史蹟 伊達邸別館

伊達邸別館は、1880（明治13）年、当主伊達邦直の指示により建築された。^{きくていゆきすえ}菊亭脩季や^{あきひと}小松宮彰仁親王などの名士が来村の折に、迎賓館および宿泊施設として機能し、また村政執行のための会議場所として使用された。



写真73 当時の様子を人形で再現した展示（伊達記念館）

大正末期からは伊達家住宅として使用されていたが、当館は当別開拓事業の象徴であり、貴重な建築遺産でもあることから、12番目の文化財として1980（昭和55）年に指定されるとともに、伊達直宗氏より当別町教育委員会に寄贈された。伊達邸別館の建築様式は木造2階建て。1階は板の間の洋間の会議室と、邦

直の書齋兼来客控室がある。2階は居間と客間で畳敷きの和室。居間には邦直と妻の志武^{しぶ}、重臣を模した等身大人形が置かれ、当時の様子がリアルに再現されている。また敷地内には、宮城県岩出山町（現・大崎市）から寄贈された杉および孟宗竹が植えられた。

・第13号 当別音頭

当別音頭は、1970（昭和45）年の当別町開基100年を記念して作られ、レコードも制作された。作詞は高柳公、作曲は藤大助、歌手は都はるみ。

当別音頭は、「当別町開基100年記念式典」において披露された。音頭に参加する女性たちを募集したところ、総勢約800人が踊りに参加、式典に華を添えた。

・第14号 トウベツアカマツセイウチ化石

青山地区内の当別川流域で、1977（昭和52）年に発見されたクジラの化石のなかにセイウチ科の化石が含まれている可能性が高いとして、1998（平成10）年、国立科学博物館で再調査が行われた。その結果、中新世後期（約1000万～950万年前）のもので、絶滅した初期のセイウチ科の化石であることが判明。この時代のセイウチ科の化石は記録が少なく、セイウチ科の進化の空白を埋める貴重な標本であることから、当別町指定文化財に指定された。当別町が所有しているが、町内には保存施設がないため、2015（平成27）年から北海道大学総合博物館に寄託している。

その他の文化財及びそれに準ずるもの

当別町教育委員会および当別町文化財調査審議会では、今後の文化財の候補として以下の4点を挙げている。

・青い目の人形 エリザベス・アーン

「青い目の人形」は、1927（昭和2）年に日米友好の懸け橋として、米国から日本の小学校などに約1万2000体が贈られた。道内各市町村には643体が分配され、当別では当別小学校、東裏小学校、弁華別小学校に配分された。

人形は当時の日本では珍しいセルロイド製で、一体ごとに名前が付けられており、そうしたことが子どもに夢と親近感を与え、大切に扱われてきた。ところが、太平洋戦争下となり状況は一変する。敵国の人形を処分すべしとの声が高まっていった。

弁華別小学校でも、子どもたちが大切してきた青い目の人形「エリザ

ベス・アーン」を処分することを校長会で決定したが、当時の井村為次校長と千葉誠教頭は、友好と平和の象徴である人形を壊すことができず学校内に秘匿した。

終戦から30年あまり過ぎた1973（昭和48）年、当時の辻岡聖信校長によって、人形は階段下の物置の奥から偶然に発見された。エリザベス・アーンは、2016（平成28）年に弁華別小学校が閉校となるまで校内に飾られていたが、その後は当別町学習交流センターに移され、保管・展示されている。

・伊達山遺跡出土物

伊達山遺跡は、伊達山の中腹から流れる沢頭の一帯に位置し、1964（昭和39）年から翌年にかけて札幌西高校郷土研究部が中心となり、発掘調査を行った。その結果、住居跡と思われる場所を検出し、縄文時代後期初頭の土器（余市式）約100点、石槍や石斧など約1000点が出土した。1970（昭和45）年3月に「伊達山遺跡調査報告書」としてまとめられている。当別町教育委員会所有（出土物）で、遺跡地は畑および牧草地として利用している個人の所有地にある。

・吾妻家文書及び関係資料

岩出山伊達家の家老で、伊達邦直に従い渡道し、当別町の開拓に貢献した吾妻謙から代々の子孫へと伝わる公文書及び私文書など、約9400点。明治から昭和にかけての当別村政などに関わる貴重な史料も含まれている。2016（平成28）年に吾妻高志氏より当別町に寄贈され、現在、当別町学習交流センターにて保管し、調査研究を進めている。

・弁華別小学校校舎

1892（明治25）年に当別尋常小学校弁華別分教場として開校し、1937（昭和12）年に現校舎が新築された。1947（昭和22）年に弁華別小学校に改称し、2016年3月に生徒減少により閉校となった。校舎は、1936（昭和11）年に建築された増毛小学校校舎（平成13年北海道遺産登録）に次ぐ、歴史的な2階建て木造校舎として稀少である。また、前述の青い目の人形エリザベス・アーン発見の舞台となった。

2025（令和7）年には、株式会社Whiskey Student がクラウドファンディングによる資金調達を行い、渡り廊下と体育館部分をクラフトウイスキー蒸溜所としてリノベーションし、日本最小規模の本格モルトウイスキー蒸溜所として活用を始めた。

(2) 代表的な文化遺産と碑

人物及び文学関連顕彰碑等

・「石狩川」文学碑

当別町ゆかりの小説家本庄陸男の功績と、当別の開拓を描いた代表作『石狩川』（1939年刊行）を讃える文学碑で、札幌大橋を渡った当別側の右岸堤防上に1964（昭和39）年7月23日に建立された。

同碑建立以降は、文学碑前において、本庄陸男生誕当日を記念した献花式が、当別観光協会の主催で毎年行われている。2004（平成16）年には生誕百年を記念し、献花式とともに関連イベントが行われた（7月16～18日）。

開催当日、会場となった西当別コミュニティセンター前では、本庄とビトエ時代の同級生だった大西孝二氏や甥の本庄覚氏によるテープカットが行われ、業績を紹介する展示や作家・吉村昭氏の講演会などが開催された。この期間中の企画として、映画「大地の侍」*10（主演・大友柳太朗、監督・佐伯清）の上映会が行われた。

*10 詳しくは本節
末尾のコラムを参照

・本庄陸男生誕の地碑

本庄陸男の生誕の地を記念し、当別観光協会によって建立された。揮毫は上口正一当別町長（当時）。碑裏面には、「いの一番にこの川を見つけたのは、肥え太った鮭の群ででもあったらうか」という小説『石狩川』の一文が刻まれている。当別町ビトエ15線3号に1978（昭和53）年11月建立。



写真74 本庄陸男生誕の地碑

・鮎田^{じょでう}如牛の碑

仙台藩岩出山伊達家の右筆家老であった鮎田四郎兵衛（如牛）は、当主伊達邦直の命を受け1872（明治5）年に子弟の教育を目的に当別初の教育施設「鮎田塾」を開校した。本碑は、如牛が1887（明治20）年4月10日に没した後、その功績を永く伝えるため建立されたもの。題字は伊達邦直、碑文は吾妻謙。1888（明治21）年5月6日に建立され、1921（明治45）年に当別神社（当時は阿蘇神社）境内に移設された。

・吾妻謙頌徳碑

1915（大正4）年11月の大正天皇御即位御大典の際、北海道拓殖功勞

者として故吾妻謙（1844～1889）に従五位が贈位されたことから、当別神社境内に頌徳記念碑が建立された。題額は貴族院議員従三位勲四等伯爵柳原義光、碑文は農学士・柳内（蝦洲）義之進。建立は吾妻謙の命日にあたる5月18日。

・長谷部栄二郎句碑

長谷部栄二郎（1887～1972）は、西当別神社の宮司を務める一方、「虎杖子」の俳号を持ち多数の門弟を抱える俳人であった。「長谷部栄二郎句碑」は、長谷部の神官勤続30年を記念し、西当別神社境内に1965（昭和40）年9月5日に建立された。同碑には「馬よゆうこう 涼しきうちに」と長谷部の句が刻まれている。

2005（平成17）年には氏子一同により、台座などの改築を行っている。

長谷部の略歴等については、『当別町史』を参照（ただし文中に北海道文化奨励賞の受賞年が1937年とあるが、正しくは1964年）。

なお同境内には、長谷部の没後に氏子一同によって1973（昭和48）年に建立された「宮司故長谷部栄二郎顕彰之碑」がある。



写真75 鮎田如牛の碑



写真76 吾妻謙頌徳碑



写真77 長谷部栄二郎句碑（西当別神社）



写真78 宮司故長谷部栄二郎顕彰之碑（西当別神社）

・近藤辰雄碑

近藤辰雄は、1947（昭和22）年に地方自治制度の改革に基づく首長公選で当選し、初代町長に就任。1967（昭和42）年まで5期20年務めた。本銅像はその功績を讃え、町民有志によって1979（昭和54）年11月、当別神社境内に建立された。

・伊達邦直歌碑

開基110年を記念し、当別伊達記念館・伊達邸別館の開館とともに、その前庭に建立。伊達邦直は「桃園」と号し、数々の和歌を残している。歌碑には、当別村を開いたころの思い出を歌った「あそ山のしげる木立をふみ分けて 住み見し月の今も替らず」の句が刻まれている。1982（昭和57）年建立。



写真79 近藤辰雄碑



写真80 伊達邦直歌碑

開拓および開発事業関連碑

・当別村開拓紀功碑

当別村開村50年記念事業の一環として建立された。碑石は陸前稲井産、台石は十勝産花崗石で工費は3500円（当時）。篆額は従三位勲四等伯爵・廣澤金次郎、碑文は農学士・柳内義之進。当別神社境内に、1920（大正9）年9月9日建立。

・灌漑溝竣工記念碑

当別西部地域の水田開発を目的に設立した「太美土功組合」による灌漑溝の完成を記念して建立された。灌漑溝の工事は、1927（昭和2）年8月から開始し、翌年8月30日に竣工した。幹線・支線を併せて約7410間（約13km）に及び、工事費5万6000円（当時）をかけた大規模なもの

であった。この灌漑工事によって太美組合内区域200町歩の造田が完了した。太美17線南2号に1928（昭和3）年9月25日建立。敷地内には1962（昭和37）年に建立された鳥居、小祠と地神、「水路装完成記念碑」（建立年不明）も建つ。

・開拓先駆者碑

昭和天皇御即位御大典の記念に千葉隆之助ら地域の地主や名主らが發起人となり、当別開拓の先駆者を顕彰するために建立された。篆額は岩出山伊達家三代目当主で正四位男爵の伊達正人。碑面には開拓先駆者の氏名を、裏面には碑文が刻まれている。当別神社（建立当時は阿蘇神社）境内に1928年12月10日建立。

・弁華別開拓記念碑

1882（明治15）年に福岡県人の柴藤善三郎らによって開拓が始まった弁華別部落の開拓50年を記念し、建立された。題額は岩出山伊達家三代目当主で正四位男爵の伊達正人。碑文は元当別村戸長鮎田小隅。弁華別神社境内に1932（昭和7）年9月3日建立。

なお、境内には、「柴藤善三郎之碑」、「弁華別開拓百年之碑」がある。



写真81 当別村開拓紀功碑

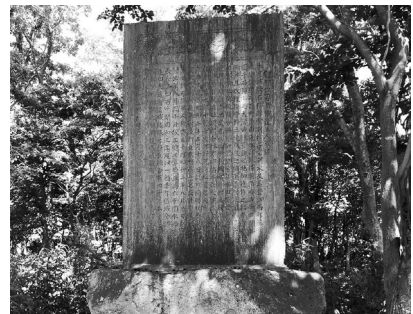


写真82 灌漑溝竣功記念碑

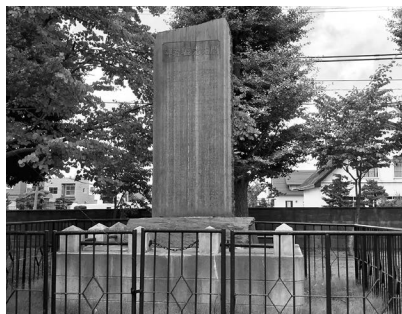


写真83 開拓先駆者碑



写真84 弁華別開拓記念碑

・墾田興村碑

1911（明治44）年9月に弁華別、田ノ沢、東小川、西小川、川下、材木沢の各部落によって結成された「当別土功組合」（現在の当別土地改良区の前身）の灌漑溝竣工20周年を記念し、建立された。篆額及び撰文は元北海道帝国大学総長で農学博士の佐藤昌介であった。弁華別須佐神社境内に1934（昭和9）年11月3日建立。現在、須佐神社は廃社となっており、碑の周辺は未整備である。

・開田の碑

1955（昭和30）年から国営灌漑排水事業が開始され、1956（昭和31）年に「篠津地域泥炭地開発事業」が施行された。本碑は、当別町と新篠津村の一部地域に水を供給する「川南揚水機場」の完成を顕彰し、加えて1996（平成8）年の基幹施設の改築を記念して建立された。当別町蔵岱2688-1「川南揚水機場」敷地内に1999（平成11）年9月8日建立。



写真85 開田の碑（蔵岱）

・楊排万穂

前述の「篠津地域泥炭地開発事業」の足跡を記念した碑がなかったこともあり、1985（昭和60）年から22年の歳月かけて完成した国営灌漑排水事業「篠津中央地区」を記念して建立された。当別町金沢1364-21篠津中央土地改良区内に2007（平成19）年9月建立。

・水と森の環境整備記念碑

当別土地改良区により、1988（昭和63）年からは国営地域用水再編対策事業として196億円をかけ、当別地域の生活用水、環境用水、防火用水の安定供給のための施設整備が行われ、2015（平成27）年に事業が完了したことを記念し、建立された。当別町若葉269「田の沢公園」内に2015年10月建立。

・水田発祥の碑

当別における稲作開始を記念して建立されたもの。稲作の始まりは、1872（明治5）年に岩出山からの第2次移民だった瀬戸勘三郎が、伊達邦直の指示で田ノ沢に「赤毛」種の種もみを用いて約2反歩を試作したことによる。篆額は泉亭俊彦町長（当時）。当別町若葉269「田の沢公園」

内に2004（平成16）年11月建立。



写真86 水と緑の環境整備記念碑



写真87 水田発祥の碑

・消防顕彰碑

当別において初めて消防組が組織されたのは1910（明治43）年、鹿野恵造ら村の有志による。その後、機械の整備などの組織的な取り組みが必要であることから、1912（大正元）年11月に道庁に申請し、翌年4月24日に公設消防組が誕生した。

本碑は1980（昭和55）年に当別開基110年を記念して、歴史ある消防団の功労を顕彰したもの。碑の左側に消防団の姿が刻まれているが、制作者は「埋もれ火の塔」と同様に坂坦道氏。篆額は鈴木善幸総理大臣（当時）。当別神社内。



写真88 消防顕彰碑

これらの碑のほか、開拓に関する記念碑には、「開拓百年之碑」（太美地区）、「開拓記念碑」（茂平沢地区、弁華別神社、獅子内神社）、「開田記念碑」（獅子内神社）、「開基百年記念碑」（川下神社、高岡神社、東裏神社、中小屋神社）などが残されている。また開発事業関連碑では「当別西部土地改良記念碑」「土功組合創立記念碑」（いずれも川下地区）、「土地改良記念碑」（川南地区）などがある。

（3）町民の文化活動

当別町文化協会

「当別町文化協会」の前身である「当別町文化団体連絡協議会」が発足したのは、1969（昭和44）年10月である。同協議会は、それまで各々

で活動していた音楽・舞踊・芸術などの各種サークルや団体が連携し合い、文化振興を図ることを目的として結成され、11団体223名によって発足した。その後、1977（昭和52）年に理事会制を導入し、団体名を「当別町文化協会」に改め、現在に至っている。同協議会の発足当初から、毎年開催してきた、「当別文化祭」は、町を代表するイベントの一つとして、当別町の地域文化振興の推進役を担ってきた。歴代会長は表29の通りである。

2003（平成15）年に、さまざまな文化活動に参加する町民が増え、加盟団体は64団体、会員数も1200人を超えたことから、組織改革を行い、展示、舞台の二つの専門部を設置、翌年からは文化祭を当別会場と太美会場とで1年交替で開催することとなった。

2019（令和元）年11月2日には、創立50周年記念式典が西当別コミュニティセンターにおいて開催された。また同センターでは「第70回当別町文化祭」が2日から4日まで開催され、踊りや楽器演奏、合唱、講談や詩吟など日頃の成果を披露した。また創立50年を記して『当別町文化協会創立50周年記念誌 ^{つなぐ} 繫』を発刊した。

2023（令和5）年度現在、37団体528名が加盟し、幅広い層によって自由で多彩な文化活動が行われている（次頁表30）。

表 29 当別町文化協会歴代会長

在任期間（年度）	氏名
1969～1974	戸田 安雄
1975～1976	荒木 鉄夫
1977～1979	山本 正巳
1980～2002	中野 実
2003～2014	中野 政幸
2015～	曾川 昭治

資料：当別町

表30 2023年度当別町文化協会加盟団体名簿

部門別		No.	団体名	会員数	代表者	
舞 台 部 門	邦楽 邦舞	民謡	1 當香会 民謡の部	4	柴田 庄一	
		詩吟	2 日本詩吟学院岳風会 太美道場	3	大畑 富雄	
		舞踊	3 西川流 日本舞踊教室 延菊会	10	丸山 安子	
			4 正派菊乃流 菊の会 当別	7	丸山 エイ子	
			5 ひょっとこ踊り 玉福	4	玉木 紘	
	洋舞	6 フラメンコ・ミ・アイレ	3	城内 万里子		
		7 子どもの為のジャズダンスサークル SKIP	20	藤江 由起		
		8 ダンスグループDDD	45	藤江 由起		
		9 アロハフラーズ	10	村上 利枝		
		10 花舞	10	鰐渕 良子		
		11 ハーラウ・フラ・オ・ナーレイヒバ・ポーラニ	16	鳥谷部 美子		
	洋楽 洋舞	音楽	12 当別町カラオケ連合会	60	当別町カラオケ連合会 傘下団体	
			12-1 当別カラオケ愛好会			
			12-2 中小屋カラオケ同好会			
			12-3 カサブランカ歌謡サークル			
			12-4 ナツメロ会			
			12-5 YSフレンズ			
			13 太美カラオケ愛好会	12	曾川 昭治	
			14 東裏カラオケ愛好会	7	瀧本 義治	
			15 當香会 カラオケの部	7	柴田 庄一	
			16 当別クローバーの会	9	中川 久雄	
			17 レディース・ハーモニー	9	堀内 教子	
			18 当別混声合唱団 パストラルクワイヤ	16	柴野 智早	
			19 チェリーベル	6	荒谷 雅子	
			20 QJB	7	向山 行雄	
			21 バンド「ふとみ愉快的仲間たち」	7	柴草 良司	
			22 エーデルワイス	8	本庄 由美子	
郷土芸能	23 当別音頭を守る会	134	村上 スミ子			
	24 とべのすけ すずめ踊り隊	29	山田 健太			
展 示 部 門	茶華道	25 当別華道連盟	8	平沢 洋子		
		26 当別裏千家茶道同好会	6	白木 昌代		
		27 西当別茶道教室	8	北 美枝子		
	書道絵画	28 西当書道会	10	鳥谷 由美子		
		29 太美書道教室	3	渡辺 宏美		
	生活文化	30 当別写真同好会	4	松田 茂利		
		31 スエタ手芸教室	4	末田 圭子		
		32 クレイ、クラフト、フラワー	2	藤田 政子		
		33 ぽかゆるたいむ	4	佐藤 照子		
		34 太美ヨガサークル	12	小山 恭子		
		35 日本棋院当別支部	14	川村 勉		
		36 パッチワーク オンリーワン	5	山田 淳子		
		文芸	37 当別短歌会	5	大口 弘美	
合計			528			

資料：当別町

文化活動グループ

・当別文芸の会

北海道ゆかりの文学作品をはじめ、広く日本や世界の文学作品を読み、身近なくらしのなかで文章表現の楽しさを学ぶことを目的として、河地良一氏を代表に2010（平成22）年4月に発足した。

2011（平成23）年より文芸誌『当別文芸』の年1回発行を主軸としながら、読書会や文学散歩、文芸の旅などイベントを開催し、文学を深めている。現在会員数は16人。

・当別歴史ボランティアの会

「当別歴史ボランティアの会」の前身は、明治以後の町の歴史について調査・伝承を行うことを目的として、吾妻鉄造氏を中心に町民有志によって結成された「当別歴史研究クラブ」である。2002（平成14）年7月には、当別の歴史研究員で歌人として活躍していた坂田資宏氏がアドバイザーに着任し、「当別町歴史ボランティア」として歴史研究のほか、郷土館の整理、記念碑などの周囲の環境整備などを行ってきた。「当別歴史講座」やパネル展なども企画し、当別の歴史を伝える活動もしている。また2015（平成27）年6月には、約5年の歳月をかけて『当別歴史ガイド』を刊行した。2020（令和2）年4月現在の会員数は12人。

・当別短歌会

「当別短歌会」は、1991（平成3）年6月に開催された「当別町短歌講習会」が始まりである。その後、講習会に参加したメンバーが中心となり歌会を開催したり、当別文化祭に作品を展示したりするなかで、「当別短歌会」として活動が定まっていった。1995（平成7）年10月に合同歌集『ともしび』第一集の発刊を機に、1999（平成11）年10月に第二集、2004（平成16）年9月に第三集、そして2012（平成24）年3月に第四集を刊行した。

2017（平成29）年からは短歌普及活動の一環として、当別町内の小中学校・義務教育学校・高校の児童生徒を対象にした「当別町子ども百人一首」を企画し、作品を募集。当別文化祭に作品を展示するとともに、最も優れた作品には「当別町文化協会会長賞」「当別短歌会会長賞」などを授与している。

2021（令和3）年6月には当別短歌会30周年を記念し、合同歌集『雪割草』第一集を発刊した。会員数は6人。

・当別音頭を守る会

当別音頭の普及のために、当別町女性団体連絡協議会が先頭になり、



写真89 『当別文芸』
第12号の表紙

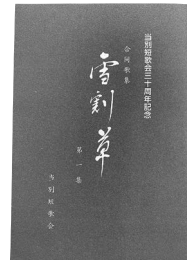


写真90 当別短歌会
三十周年記念合同歌集
「雪割草」

保存活動をしてきたが、2002（平成14）年7月に、当別町の郷土芸能として音頭を守り伝える目的で、「当別音頭を守る会」（2021年現在、賛助会員160名）が設立された。

以来、当別神社例大祭や町内外のイベントにも積極的に披露する場を広げ、2011（平成23）年には、全日本民謡指導者連盟主催「たのしい民謡」に選出され、当別町の民謡として広く認知される機会となった。

こうした長年の活動の結果、当別音頭は郷土愛を高め、町の芸術文化の振興にも寄与するものとして、初の無形文化財として指定された。

「当別音頭」のレコードB面には、当別中学校合唱グループによる「当別町開基百年讃歌」（作詞・井上治雄、作曲・岡崎豊治）が収録されている。



写真91 当別音頭

（4）祭・イベント

・当別神社例大祭

当別神社例大祭「当別まつり」は、例年8月15日の例祭日の前後の3日間で開催される。神輿渡御や盆踊りも行われ、初日の宵宮祭ではステージにて当別音頭や日本舞踊、地元アンサンブルによる演奏会などが披露される。2日目、3日目には剣道・相撲・弓道大会のほか、歌謡・演歌バラエティショーなども開催している。大祭期間中は、日頃は静かな鎮守の場所に多くの人々が集い、賑やかな3日間となる。

また例大祭の前日には、当別町商工会主催の「とうべつ花火大会」が阿蘇公園で開催される。約4500発の花火が打ち上がり、祭りの前夜祭的なイベントとして恒例行事となっている。

・当別町文化祭

文化芸術活動の発展を目指すために当別町にある文化協会加盟団体が各種展示や創作発表を奨励・実行するとともに文化芸術に親しみ鑑賞するために、毎年11月頃に町内で盛大に開催されている。



写真92 当別まつりの盆踊り

コラム 劉連仁生還記念碑の建立

1958（昭和33）年2月、材木沢の山中に穴ごもりしていた中国人らしい男性が保護された。この男性こそ、現在、当別町若葉地区に生還記念の碑が建つ「劉連仁^{リュウリェンレン}」氏である。

太平洋戦争中の1942（昭和17）年11月、日本政府は、「華人労務者内地移入に関する件」を閣議決定し、これにより労働力の確保として約4万人の中国人が日本へ渡った。劉氏はその一人であった。劉氏が送り込まれたのは、沼田町の明治炭鉱昭和鉱業所だった。劉氏は過酷な労働の日々のなかで、1945（昭和20）年7月30日、仲間4人と事業所から逃走した。

劉氏は終戦を知らず、13年もの間（劉氏を除く4人は途中で保護された）、逃亡生活を続けていた。保護された劉氏は、支援団体と政府との交渉の結果、1958年4月10日に中国残留邦人の引揚げ船に乗り、故郷へと帰還を果たした。

劉氏が帰国してから31年の時を経た1989（平成元）年、劉氏の発見者である袴田清治氏と木屋路喜一郎氏が、有志らとともに「劉連仁さんを当別に迎える会」を発足させ、1991（平成3）年10月20日、劉氏の来道が実現した。10月22日、袴田氏らとの再会が実現し、同日午後からは町役場で「歓迎交流会」が催された。

劉氏訪問を機に、町の住民ら約10人が中心となり「劉連仁生還記念碑建立実行委員会」（委員長・三上勝夫北海道教育大教授）を発足させ、記念碑建立の募金活動が行われ、当初の目標を上回る500万円を超える

金額が集まった。

2002（平成14）年9月1日、完成した碑の除幕式が行われた。碑の完成を楽しみにしていた劉氏だったが、その2年前に87歳で亡くなり、除幕式には長男の煥新^{カンシン}氏が出席した。

劉連仁生還記念碑は、発見現場から約2kmの地点に建てられており、

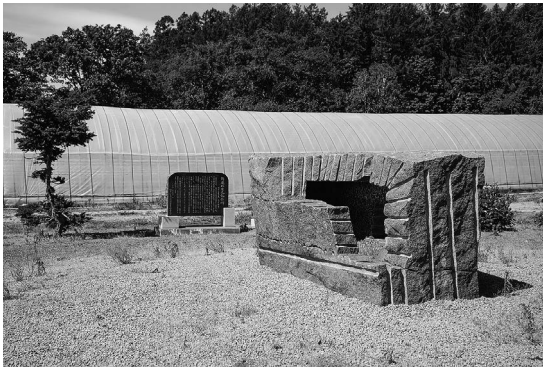


写真93 劉連仁生還記念碑

幅1.2m、長さ2m、高さ1mで、御影石の内部をくりぬき、劉氏が身を隠した山中の穴を思わせるデザインとなっている。設計は彫刻家で北海道教育大学助教授の丸山隆氏（除幕式前日に47歳で病没）。劉氏発見の経緯とともに、「劉連仁生還記念碑」建立の取り組みは、当別町民の平和運動として、まちの歴史に刻まれている。

コラム 映画「大地の侍」

「大地の侍」は、本庄陸男の『石狩川』を原作とした作品である。1956（昭和31）年に東映で製作されたが、再上映の機会がなく関係者の間では幻の映画となっていた。幸運にも当別町役場に、当時寄贈された16mmフィルムが保存されていた。

映画のロケ地は残念ながら当別ではなく、恵庭市島松の自衛隊演習場などであったが、開拓当時の様子を忠実に描いている。さらにこの映画

のフィルムそのものが、製作した東映に1本だけ保存されているほか、16mm版が当別町と岩出山町（現・大崎市）の2本しか現存しないことから日本映画文化の貴重な史料でもある。

映画「大地の侍」の16mmフィルムは劣化が激しく保存方法が懸念されてきた。「一般財団法人HAL財団」は農業振興を通じた社会貢献として東映から著



写真94 開拓当時の様子を描いた小野寺栄の版画

作権を取得、2021（令和3）年5月にDVD化を実現した。

〈データ〉「大地の侍」1956年／東映東京／白黒／スタンダード／1時間46分／監督：佐伯清／原作：本庄陸男『石狩川』／脚本：高岩肇／撮影：藤井静／音楽：小杉太一郎／美術：北川弘／出演：大友柳太朗、高千穂ひづる、伊藤久哉、三條美紀、杉村春子、高木二郎、加東大介、千田是也

〈引用・参考文献〉

北海道立教育研究所編『北海道教育史 戦後編1』（北海道立教育研究所、1986年）
『北海道医療大学創立20周年記念誌』
『北海道医療大学創立30周年記念誌』
当別町青年団体協議会編『翔ばたこう 未来へ今 創立50周年記念誌』1996年
『当別町女性団体連絡協議会 創立50周年誌』2019年
当別町スポーツ協会編『次代の60年に向けて新たな出発 創立60周年記念』2020年
『当別町文化協会創立50周年記念誌 繫』2020年
各小中学校閉校記念誌